

オキシダータ治療法

60
別冊
142

058516-000-5

60-142

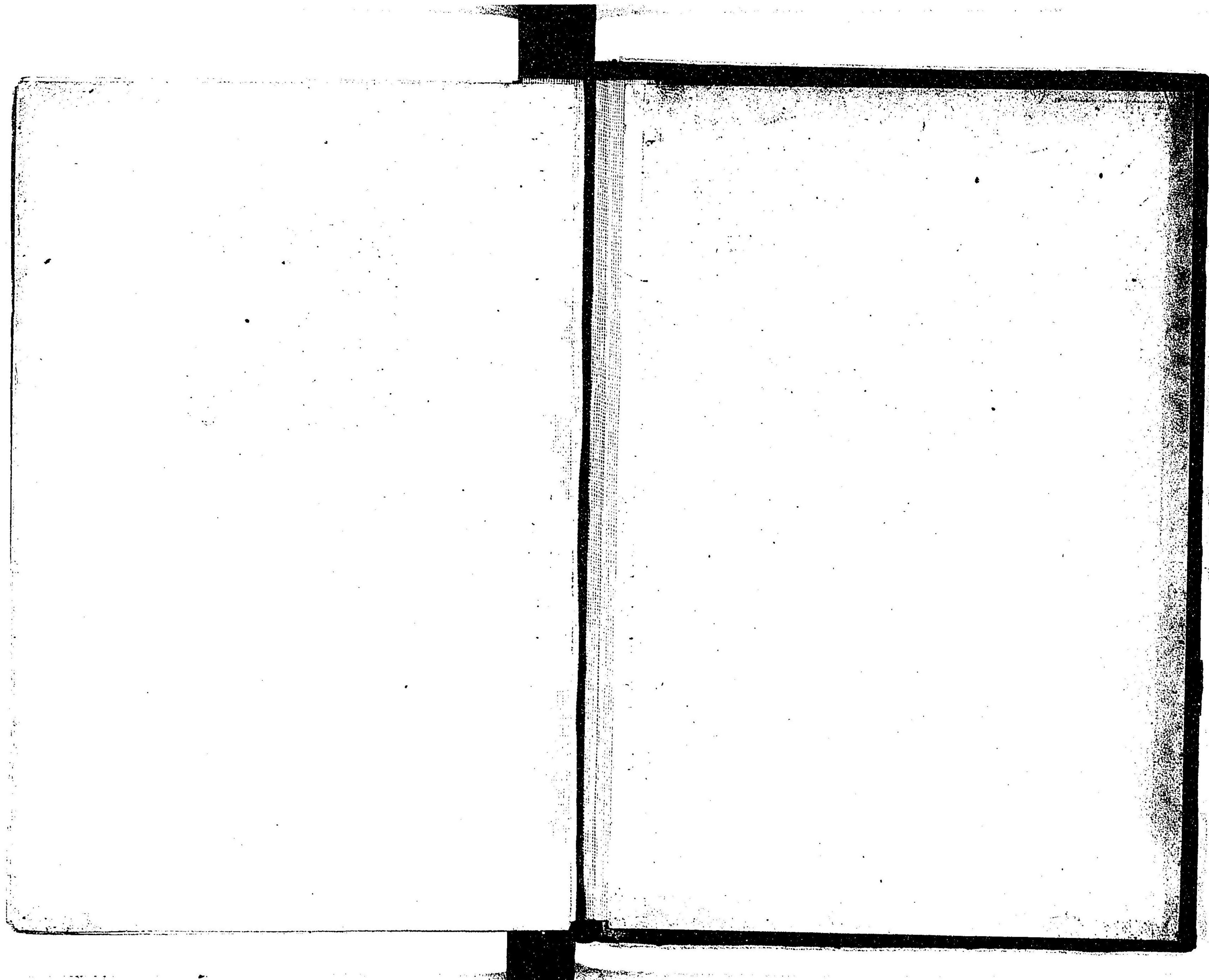
オキシダータ治療法

近藤 行蔵 / 著

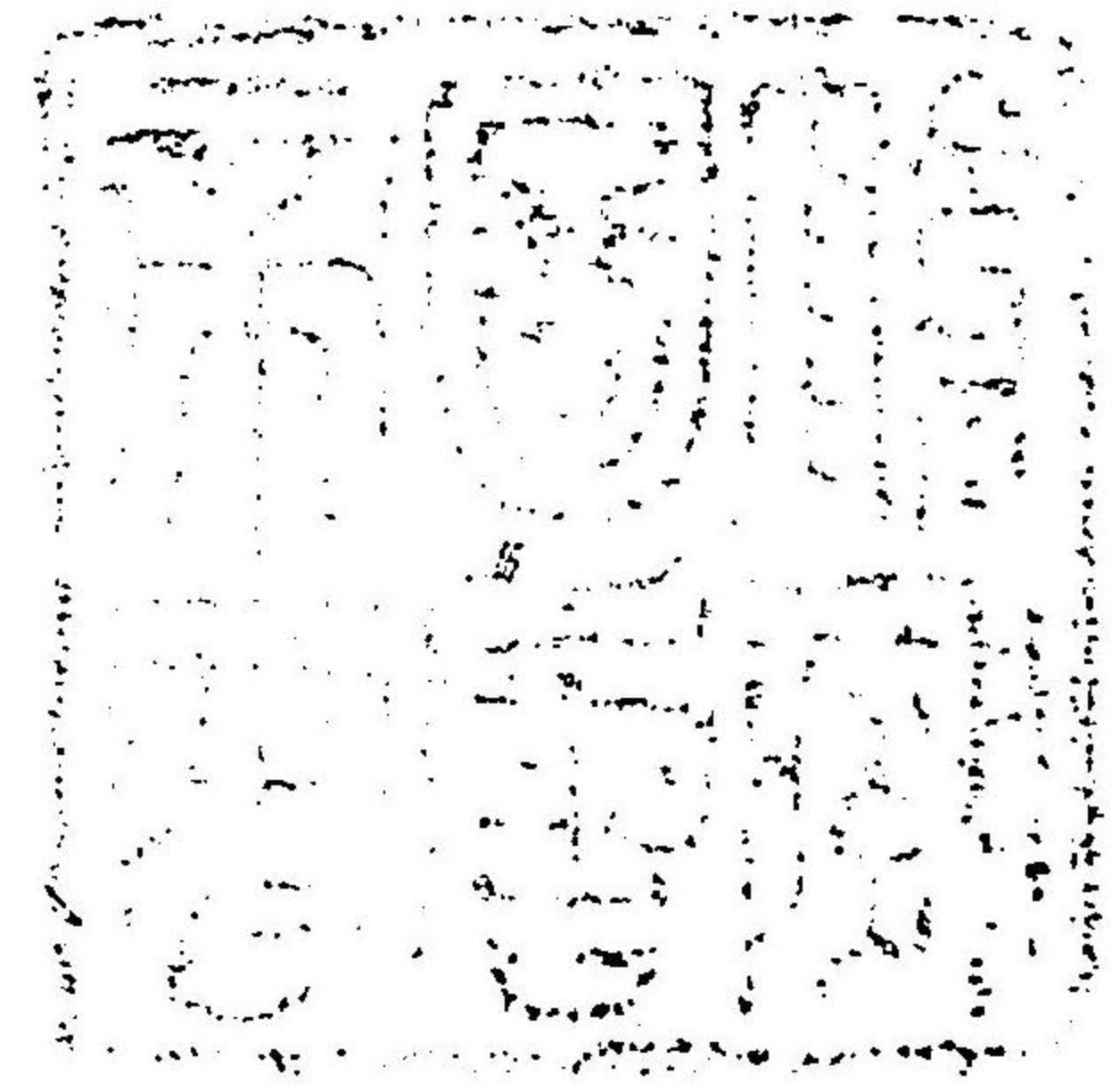
M35

CBC-0034



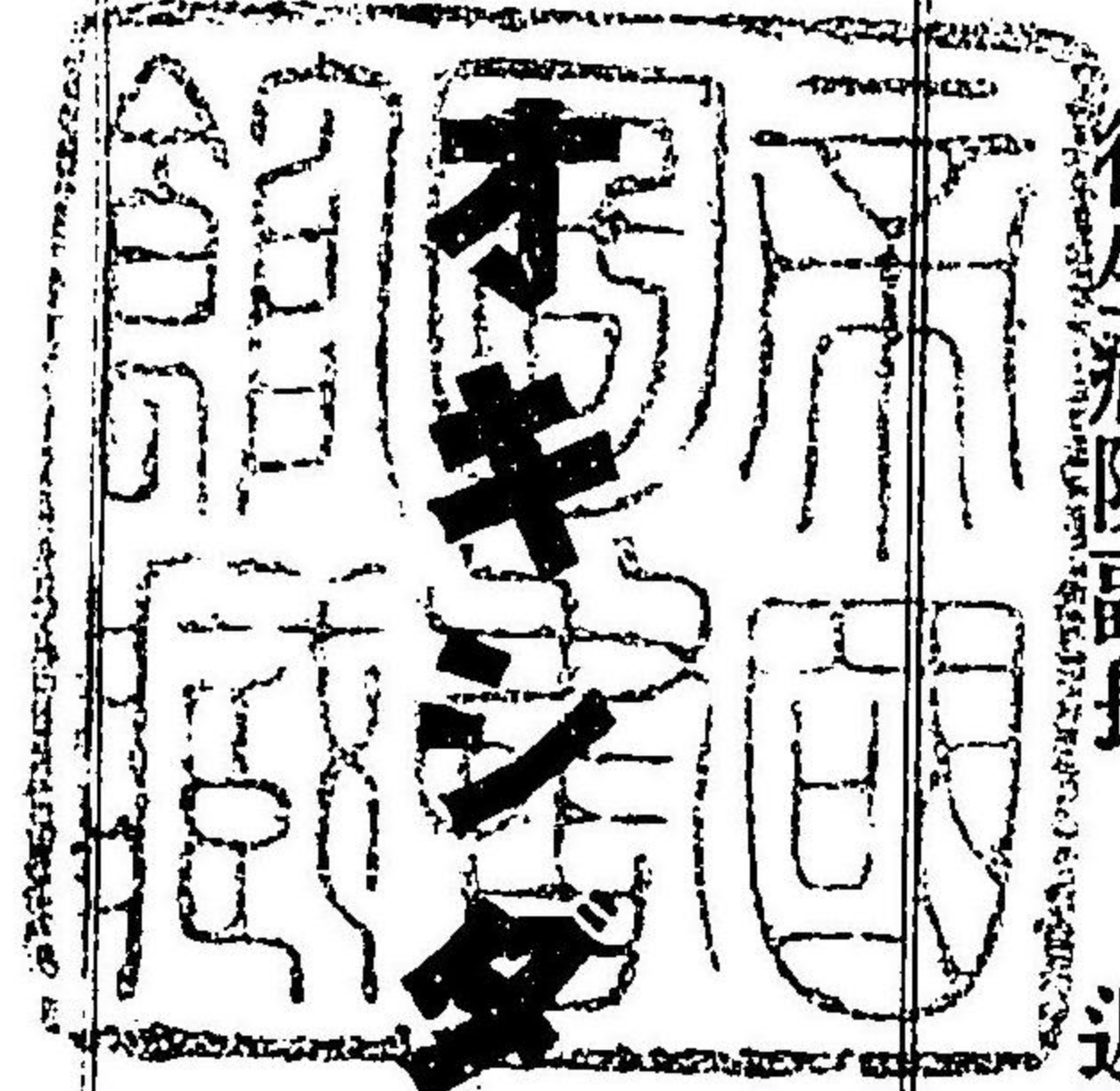


60-142



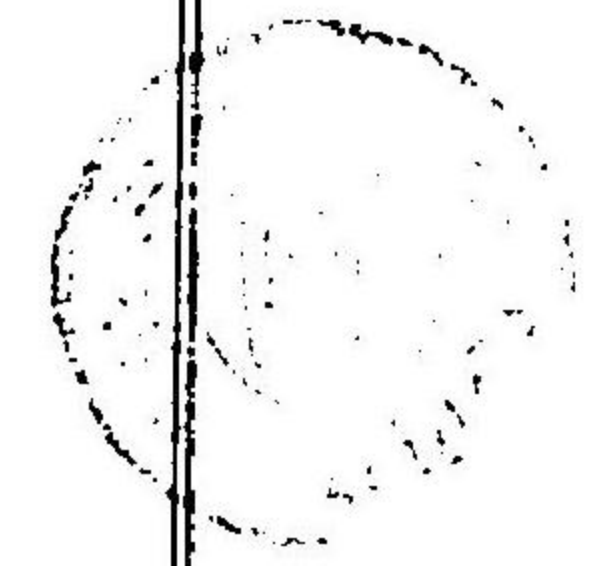
醫學士 土屋岩保 校閱

復生病院副長 近藤行藏 著



夕治療法

貝汀書屋藏版



『化合酸素』治療法序

近藤君ハ篤ク濟生ノ術ニ志スノ士ニシテ、酸素療法ノ有効ナルヲ信シ、其作用ト人體各器官トノ關聯ヲ通俗的ニ敷演シテ、此一書ヲ著ハス。説ク所導々能ク人ノ腦裏ニ沁入シ、讀者ハ持リ酸素療法ノ効用ノミナラズ、人體生理ノ梗概ヲモ會得シ、藥ヲ待タザルモ健康

ヲ保ツノ益アルベシ。近藤君ノ勞ヲ多
トシ、茲ニ一言ヲ冠ス。

明治三十五年七月

東京帝國大學教授醫學博士 高橋順太郎記

オキシダータ治療法挿畫目次

第一圖 氣管支および其分支(説明はその裏面にあり)	卷首
第二圖 肺の血管を外より見たる圖(全上)	全
第三圖 (甲) 肺臓の乙 肺の氣胞	全
第四圖 消化器官の概要	全
第五圖 結核病者の肺の裏面(説明はその裏面にあり)	全
第六圖 氣體吸入器	卷尾

オキシダータ治療法目録

第一編

第一章 緒言

●疾病は自然の理法に戻りたる結果……一●疾病の治癒は自然の秩序に復すること……二●醫は生理の趨勢に隨ひその補助をなすに過ぎず……三●「酸素療法」は「自然療法」の中最も治効あり……四●氣槽療治の不便……五●結局酸素は人生に缺くべから

第二章 『酸素の説明』

す……三●殊に化合したるものは天賦の良薬……三●テナルド氏の製法に基き大改良を加ふ……四●この治癒法の効能……五●眞理の有のみを述べて世に訴ふ……五

●酸素は空氣中の一原素……七●空氣は地面を距るに隨ひ稀薄くなる……七●人生に空氣の必要なるはその中に含みたる酸素の必要なるため……八●酸素發見の當時は「賦命氣」名づけたり……八

第三章 オキシダータとは何ぞや

●オキシダータとは「化合酸素」にして遊離酸素よりも一層の効力あり九●物質化合の原理……九
 ●「發生機作用」……一〇●「酸素」と「阿罪」の相違……一〇●「阿罪」の天然に發生する量は僅微なること……一〇●「阿罪」は水に溶けがたし……一三●「化合酸素」の製法……一四●テナルド氏の製法は人體の吸入に適せず……一四●容易に分解れて逃散する……一四●刻苦して遂に精製することを得たり……一五●空氣中有効性分の粹を集めたること同じ……一五●藥材にあらず……一六

第四章 オキシダータは何故に病を治すの効能ありや

●三様の作用……一六
 ●第一節 器官的作用
 ●内外呼吸……一七●肺の構造……一七●肺の氣胞……一八●不自然なる肺臓の束縛……一八●衣服、裝飾、職業等のため肺の働きを害すること……一九●自由に肺の働きをなすものは世に稀れあり……一九●氣胞の萎縮……二〇●内部の有様は眼に見えざる不具者……二〇●器官的作用に二重の効能あり……二一●「故意的呼吸」……二一●況や多量

の酸素を吸入するに於てをや……二二●氣胞と酸素との關係……二二

第二節 化學的作用

(一)呼吸器に於ける化學的作用……二四
 ●吸息したる空氣は呼吸すべき分量減じ性分異なる……二四●心臓……二五●肺と心臓との關係……二五●「進行性産物」……二五●肺は化學室にして心臓は二種の血を取次ぐ運送間屋……二六●内呼吸……二七●空氣の不潔……二八●空氣中の酸素缺乏……二九●不潔なる空氣の害……三〇●空氣中の有機物……三一●空氣中に於ける「バクテリア」の生活……三二●空氣中の塵埃は細菌を人體に運搬す……三二●酸素不足の害……三三●毛細血管中に酸素の存する人は稀れなり……三四●肺はその職分たる血液の清潔法を終らざる……三五●清潔法を終らざる血液の存するは血毒症の原因をなす……三五
 (二)消化器に及ぼす化學的作用……三六
 ●唾液消化……三七●胃液消化……三七●腸液消化……三八●胃液中の鹽酸は殺菌の効力あり……三九●「コレラ」菌嚙下の實例……四〇●消化液の中一種たりとも分泌不充分ならば「消化不良」なる……四〇●日本人には胃病者多し……四一●消化器には血管の分布比較的に多し……四二●血液中に酸素多ければ消化液の分泌を増す……四二

第三節 神経に及ぼす作用

●神経系統……四三●神経の鋭敏なるは電氣の作用との説……四四●血液は神経質を養ふ……四五●血液不潔、營養不充分は精神を痴鈍とす……四五●清潔なる血は精神を快活とす……四五●血液が酸化作用を起す瞬間には電氣作用を起すとの説……四六

第五章 酸素の供給充分なる結果

●酸素充分ならば諸器官新らしき活動を生ず……四七●體内の汚物を排泄し盛すときはその場所を充すために食欲を促す……四八●物質の同化……四八●新陳代謝……四八●彈力および反撥力……四九●諸器官運動の整備は人生無上の幸福……四九

第六章 オキシダータの實効ある證據

●天然に發生する「化合酸素」の僅少……五一●「阿罪」の發生する事情……五一●海邊または山間に病氣を養ふて効能ある理由……五二●獨逸に行はるる空氣療法の治療……五二●天然に發生する僅少のものすら効能あり況や濃厚のものなや……五三●歐洲諸大家の實驗説……五四……五五●グスマル氏○フェルツト氏○リシグ氏○ピンツ氏○アイゼライン氏○スターベル氏○レンデル氏○スミットおよびステルン氏○レンチー氏

第七章 結論

●上來述べし所を一括す……五六●室内空氣の清潔法……六〇●恐るべきは塵埃……六〇●乾燥たる空氣は病氣を傳播する理由……六〇●空氣中の塵埃は殊に室内に多し……六一●室内裝置……六一●此裝置は多人數集會の場所に必要……六一

第二編

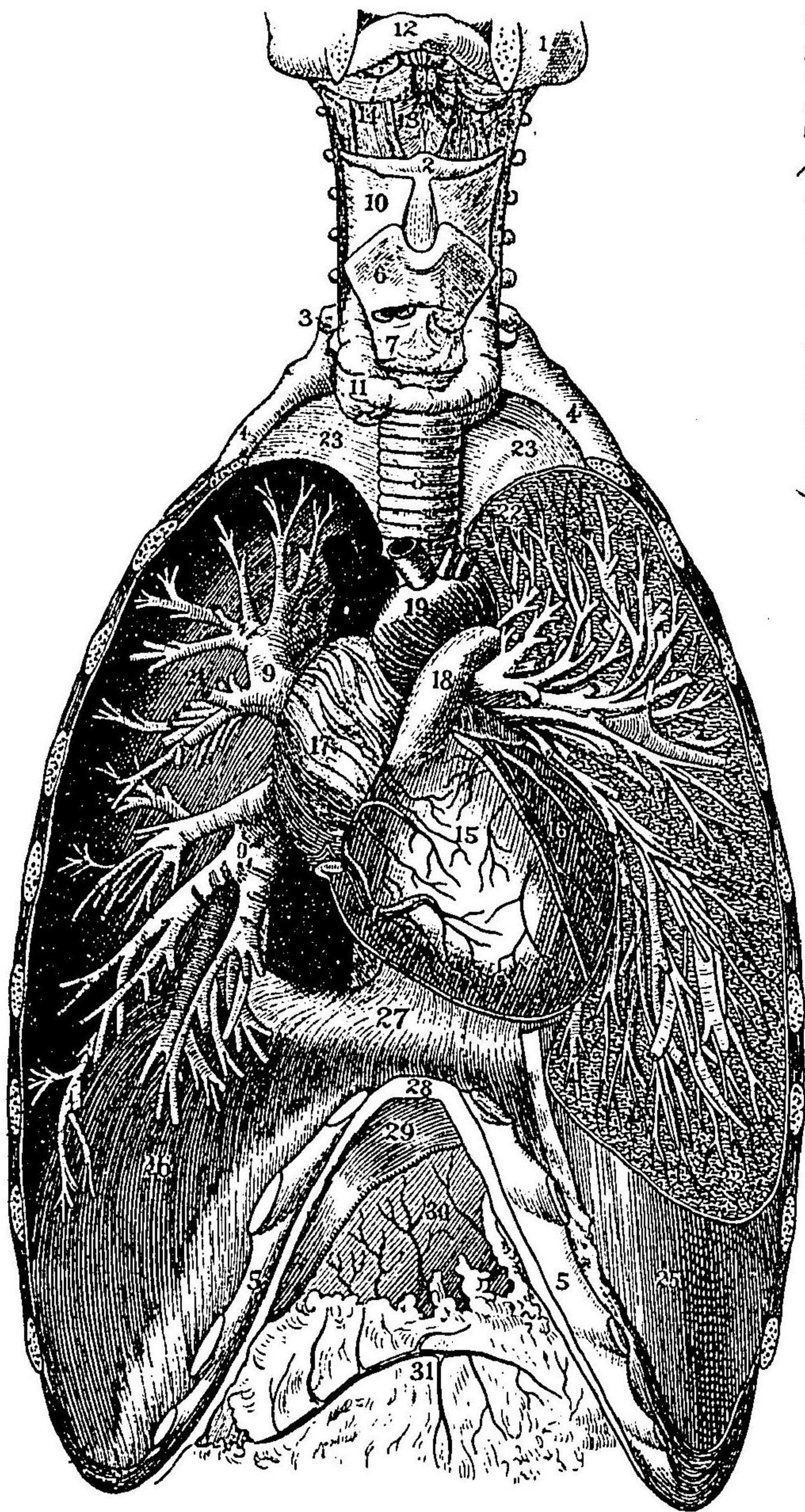
第二章

オキシダータの治療法は如何なる病氣に最も効能ありや

●殆ど萬病に適す……六二●總ての呼吸器病……六三●肺病のこと……六三●肺病に驚るゝもの、數は日に月に増加す……六四●流行病に驚るゝものよりも多し……六四●未だ必治の良法發見せられず……六四●二種の誤謬……六五●共に治療すべき時期を誤つ……六五●肺または心臓の病は苦痛を自覺すること……六六

第二章 肺病の徵候

●大敵の襲來る徵候に三種あり……六七●初期……六七●痲痺……六七●小結節……六八●輕き咳嗽は大方るものよりも惡微……六八●初期に併發する病氣……六八●第二期……六九●第三期……六九●筋肉陷凹の



第壹圖 (氣管支及其分支)

理由：七〇●両肺の結核：七〇●結核の存在は苦痛の感なし：七一

第三章 肺の病理

●結核とは如何：七一●その数と大きさを増す：七二●瘰癧：七三●腫瘍：七三●化膿：七三●膿瘍：七三●膿潰：七四●空洞：七四●膿潰にいたるも傷痕を残して癒ることあり：七四●病後は一層危険：七四

第四章 肺の細菌

○結核桿菌：七五●乾燥して空気中にあるときは殊に恐るべし：七五●オキシダータは直接に細菌の隠棲に相接す：七六●遺傳の誤解：七七●肺病は體質を遺傳する事あるも病毒を遺傳せず：七七

第五章 この治療法の最も適應する肺の病期

●人生必須の療法にして殊に肺病の特効法：七八●呼吸の一半を失ふたるものも尙ほ全治したる例あり：七九●簡単に徴候を知るの心得：七九●早き注意に勝れるはふし：八〇●平素衛生の緊要：八一●病者の運命は病者自身の手の中にあり：八一

第六章 オキシダータ治療法の適應する諸病

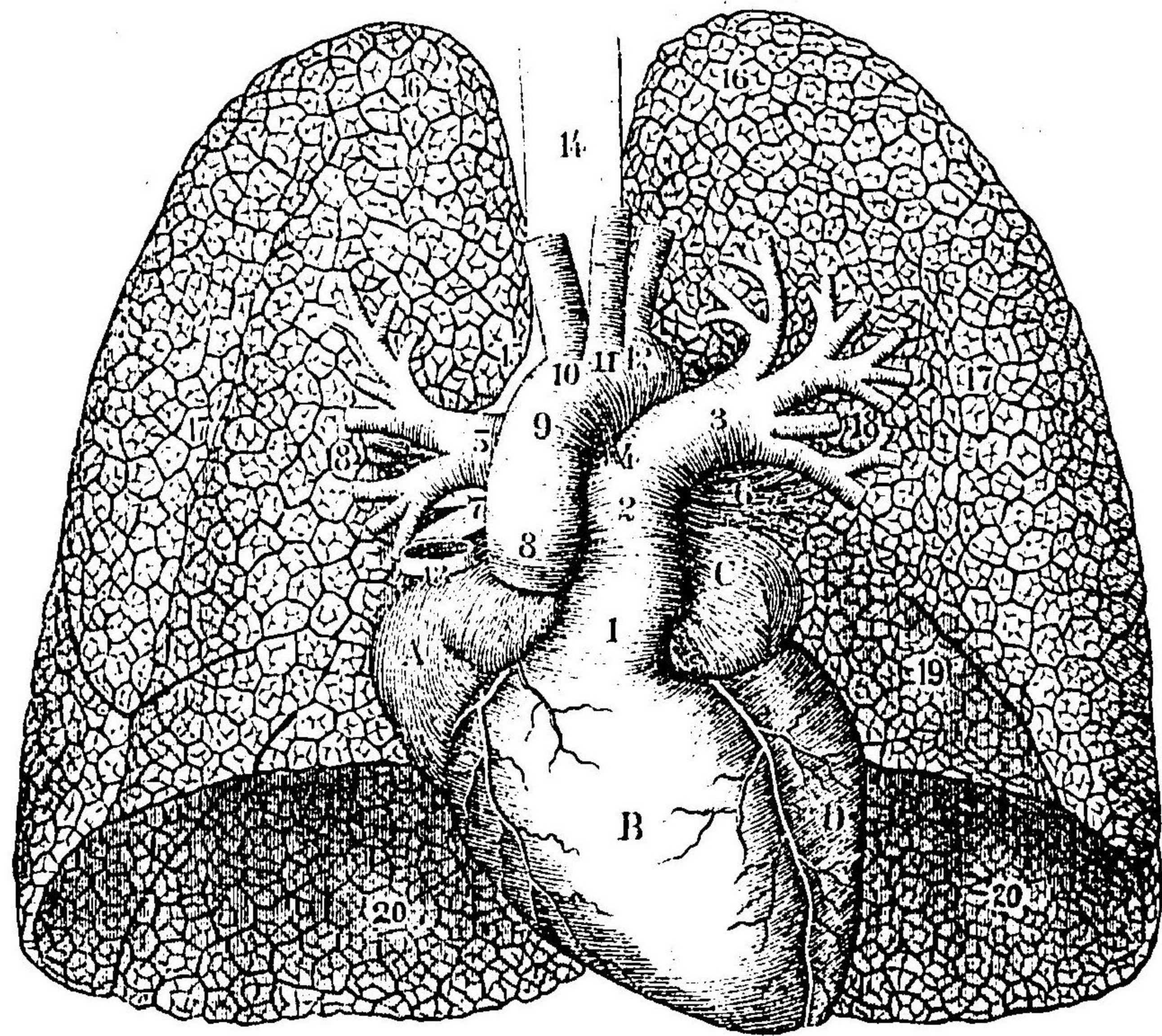
●道理を推し考ふるときは此療法の適否は何人に

も知らる：八三●呼吸器諸病：八四●氣管諸病：八五●肋膜炎：八六●消化器諸病：八七●癩瘵：八八●脚氣：八九●心經諸病：八九●淋疾：九〇●腺病：九一●皮膚諸病：九一●血行器諸病：九四●腎臟病：九五●膀胱諸病：九五●生殖器諸病：九六●萎黃病：九六●瘰癧病：九七●子宮病：九七●新陳代謝に關する諸病：九七●傳染病：九八●微毒：九九●癩病：九九●諸病の回復期および病後：一〇〇●この治療法を實施するときはその効能著しく外観に現はる：一〇〇

第七章 使用法

●光線を遮り寒冷の場所を貯ふべし：一〇〇●原液を稀釋する水は純良なるを要す：一〇一●雨水貯蓄の方法：一〇一●吸入器使用法：一〇二●吸入するときの姿勢：一〇三●酸素は分解せずして容易に肺中に入る：一〇四●吸入の時間および呼吸の數：一〇五●鼻腔より吸入する方法：一〇五●回数および時期：一〇六●使用後の液は貯へおき外用に供するを得る：一〇七●吸入後の感覺は人々相違あり：一〇八●吸入器内の温度：一〇八●吸入後の注意：一〇九●外用の方法：一〇九●この治療法を持續中は禁酒、禁煙を要す：一一〇●附言：一一二

第貳圖 (肺の血管の外見りたる圖)

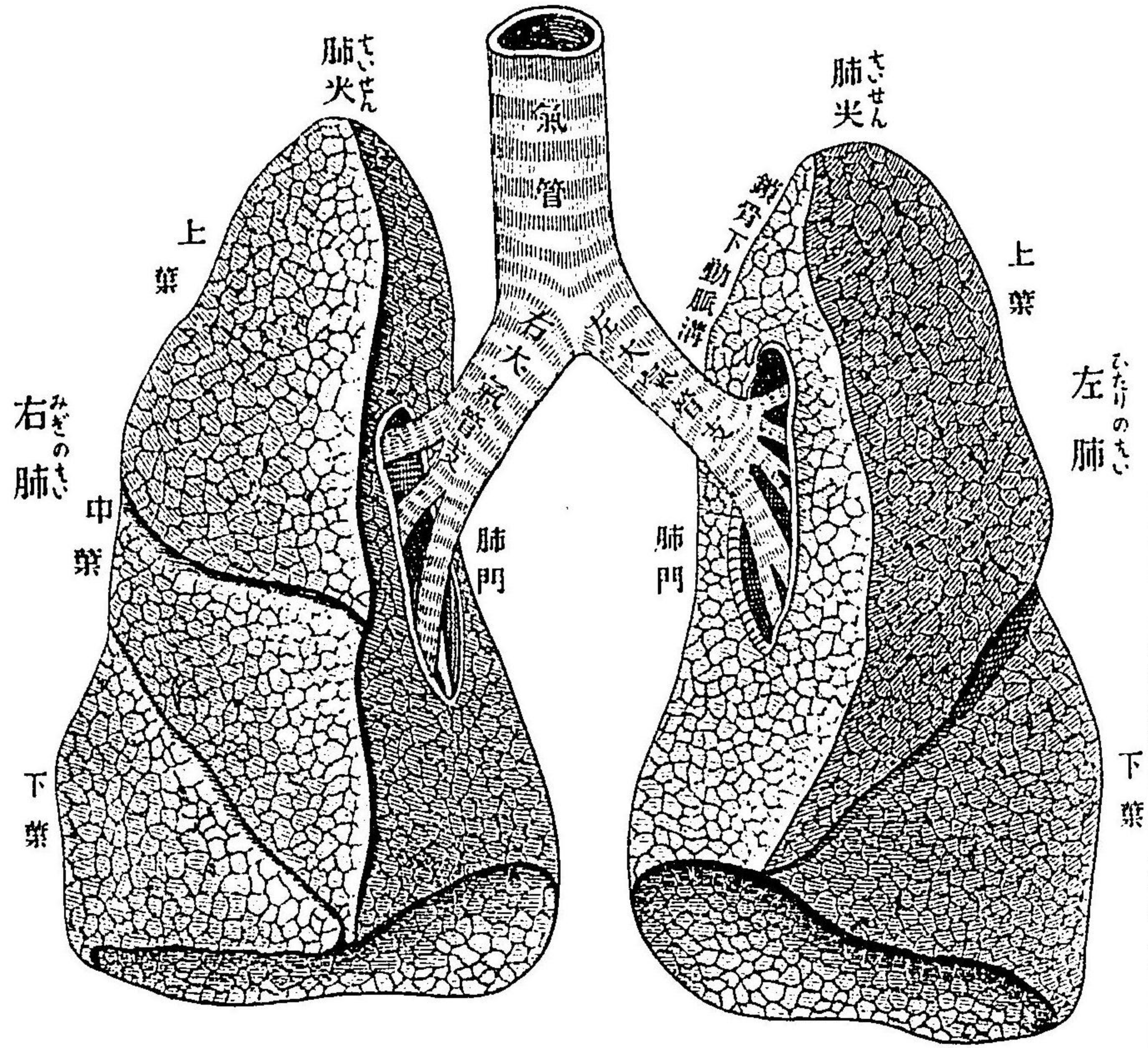


第一圖 氣管支及び其分支(實物四分の一)

- 頸部の血管、筋肉及び胸壁を取除き、胸部の最も廣き所を截開きたるものにして、右肺は氣管支の主なる分支を、左肺と同一位置に存して取去り、心臓の周圍にて心包を開き、喉頭は胸部の諸臓器の爲に、稍垂下したる者なり(フロリープ氏に由る)
1. 下顎骨
 1. 舌骨
 3. 頸部脊髄横突起
 4. 第一肋骨
 5. 肋骨弓
 6. 喉頭軟骨
 7. 環状軟骨及び圓錐狀靱帶
 8. 氣管
 9. 右肺の氣管支
 10. 舌頭頭膜
 11. 甲状腺
 12. 舌尖
 13. 舌筋
 14. 舌下腺
 15. 右心室
 16. 左心室
 17. 右心房
 17. 左心房
 18. 肺動脈
 19. 肺動脈
 20. 上大静脈幹
 21. 下大静脈幹
 22. 氣管支及左肺血管の分支
 23. 肋膜の尖
 24. 右腹腔
 25. 左腹腔
 26. 横膈膜筋肉部
 27. 横膈膜腱様部
 28. 腹膜
 29. 肝臟
 30. 胃
 31. 大網膜

第参圖

(一の分三物實) 臟肺 (圖甲)

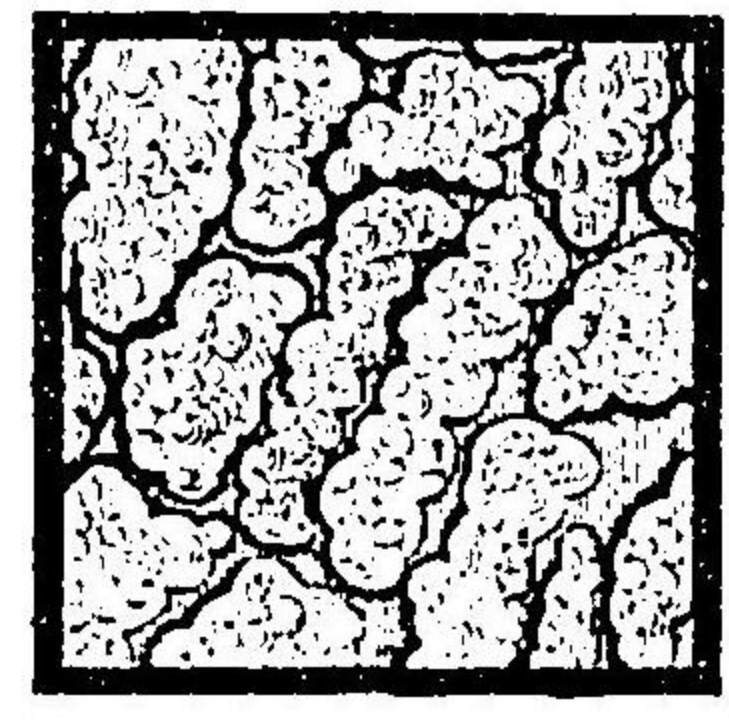


第二圖 肺臟および心臟乃ち肺の血管を前より見たる圖
 (心包を取去り肺臟を少しく擴げたるものにて實物の三分の一)

- 心臟
- A. 右心房
 - B. 右心室
 - C. 左心房
 - D. 左心室

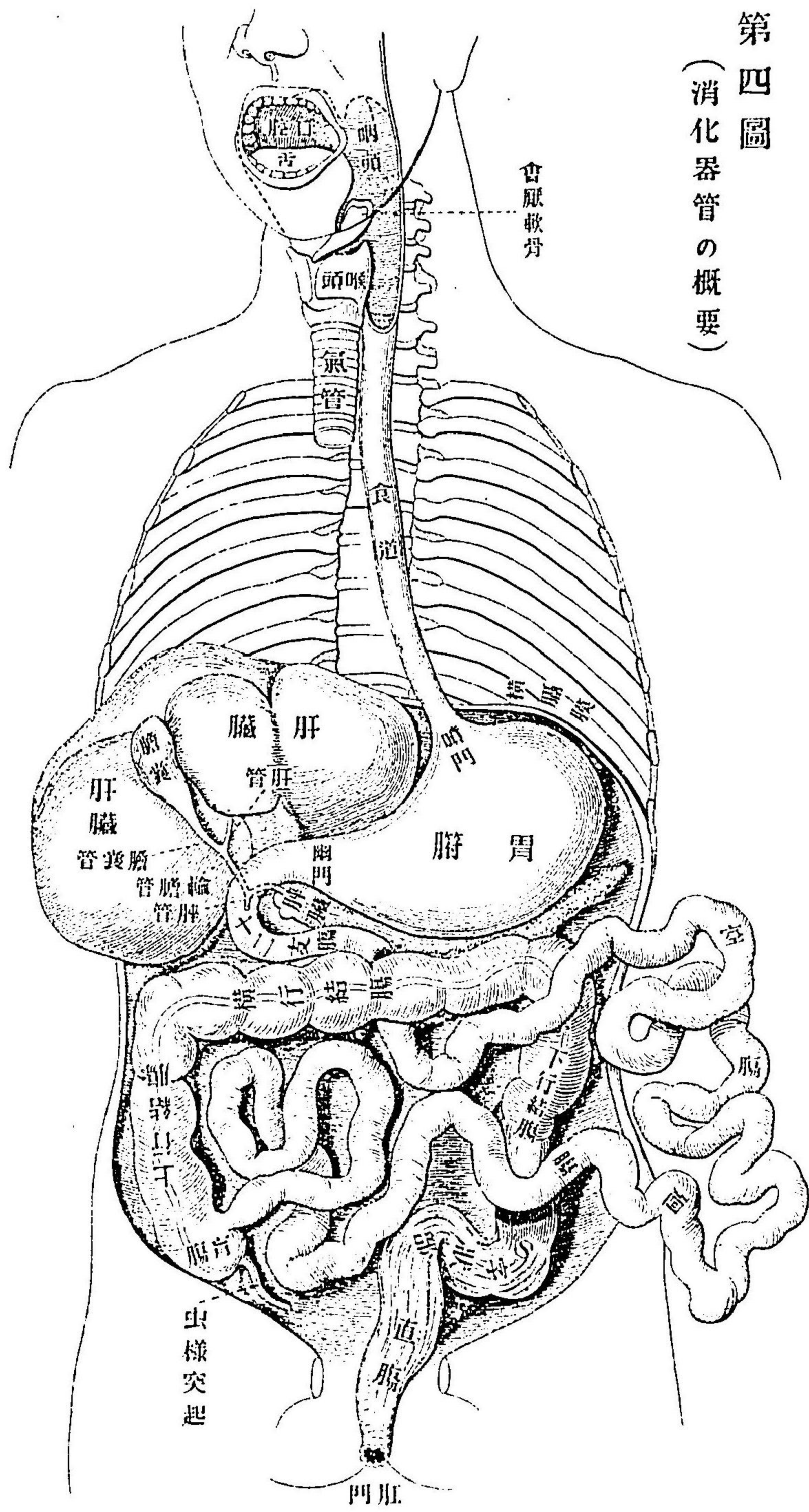
1. 右錐體動脈
2. 總肺動脈
3. 左肺動脈
4. 大動脈韌帶
5. 右肺動脈
6. 左肺靜脈
7. 右肺靜脈
8. 上行大動脈
9. より(に)なる(動脈弓)
10. 動脈樣幹
11. 左頸動脈
12. 左頸骨下動脈
13. 上大靜脈幹
14. 氣管
15. 右氣管支
16. 肺尖
17. 前緣
18. 肺門
19. 心臟窩
20. 肺基底

(乙圖)

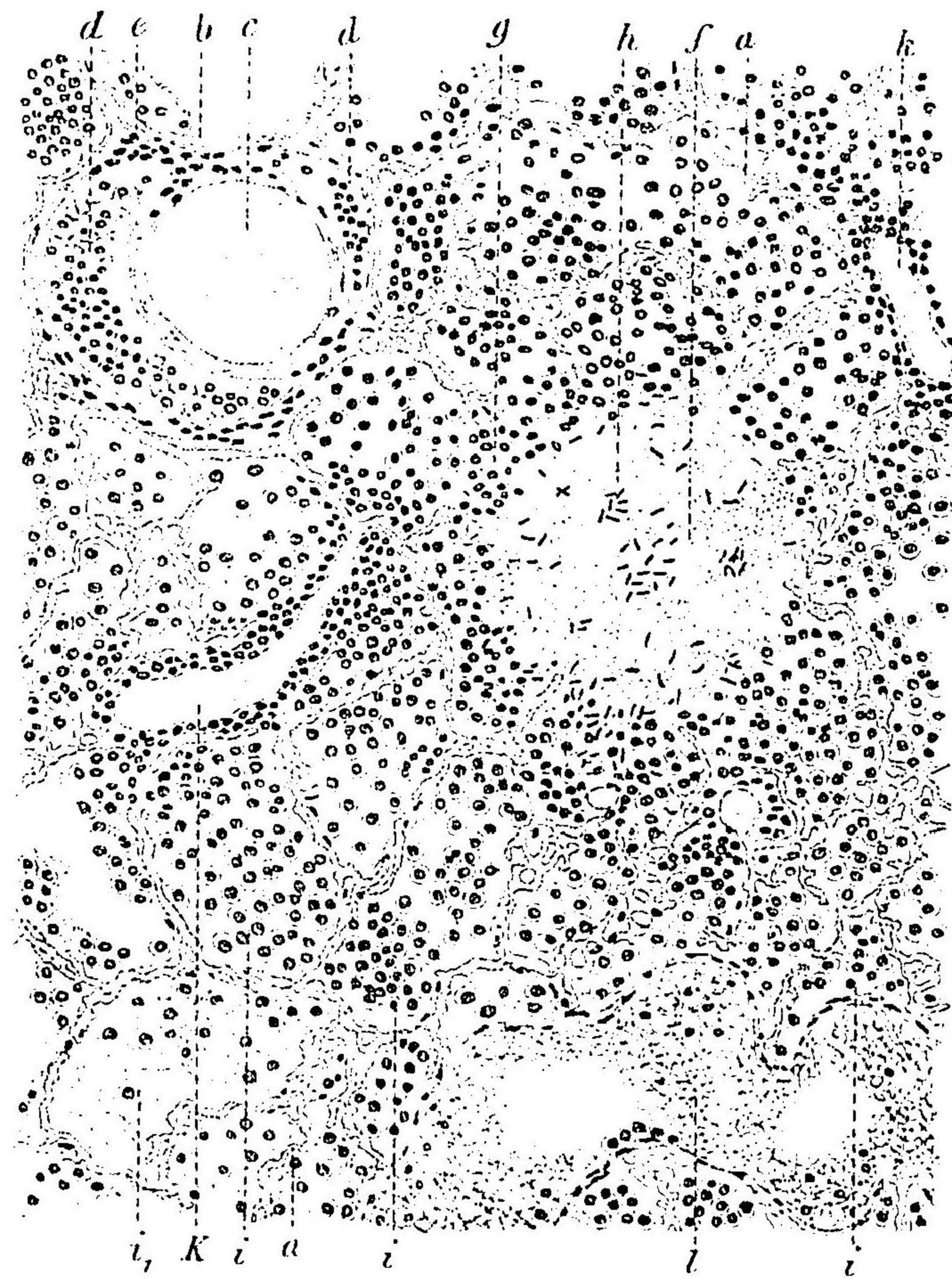


胞の氣胞
 (肺臟の裏面)
 1. 金屬を銘
 して注込み
 たるもの
 一、截面を
 顯微鏡にて
 増大したる
 もの

第四圖
(消化器管の概要)



第五圖(結核病者の肺の裏面)



第五圖 結核病者の肺の裏面

新鮮なる粟粒結核竈(實物の八十倍)

- a. 充血せる毛細管を有する氣胞間の隔壁
- b. 小氣管支
- c. 充血せる動脈
- d. 血管の周圍の淋巴管(分泌物の爲に擴がりて甚たしく加大なりたるもの)
- e. 淋巴管に接したる組織
- f. 乾酪變性中央部
- g. 結核竈の細胞よりなれる周壁
- h. 結核桿菌(一層判然せしめんがため周圍のものよりも尙二倍に増大したるもの)
- i. 氣胞中に存する細胞及び細胞纖維狀滲出物
- i. 纖維狀滲出物
- l. 周圍より細胞が浸潤みたる靜脈
- l. 滲出物の爲め中等度に擴りたる淋巴管

『オキシダータ』治療法

醫學士 土屋岩保校閱
復生病院副長 近藤行藏著

第壹編

第壹章 緒言

○疾病は自然の理法に反りたる結果
○疾病の治癒は自然の秩序に復するこ

人の身體に疾病といふことあるは、人間創造より必ず人生に伴ひ起るべき害悪にはあらずして、發達上造化自然の理法に戻りたる所あればこそ、始めて疾病といふことはあるなれ。されば疾病の治癒るといふことは、人體諸器官の活動が天然自然の秩序に復するといふことに外ならずして、

○醫は生理の趨勢に隨ひ其補導をなすに過ぎず

○酸素療法は自然療法の中最も治効あり

如何なる名醫大家も、時計の機械を取崩しまた再び組立つるがごとく、人力を以て人體諸器官の活動を整ふることはなし能はざる所にて、醫はたゞ天然自然の理法を詳かにして、生理の趨勢に隨ひ、たゞその補導を爲すに過ぎざるなり。故に疾病を治すには自然に隨ふの外なく、天然物の中最も効用廣きは『酸素』にして、萬物の中これを含み居らざるものは極めて稀なるほどに廣く存在し、人生の生活に最も必要缺くべからざるものは『酸素』に若くものなかるべし。而して『酸素療法』は一種の空氣療法にして、自然療法の中最も治効あるものと云はざるべからず。

○氣槽療法の不便

○結局酸素は人生に缺くべからず

○殊に化合したるものは天賦の良薬

酸素療法は歐米にありては氣槽療法とて、疾くより行はれ居れども、瓦斯のまゝを病者に吸入せしむるものなれば、病者自家にありて容易く實行し得られざるの不便あり。殊に『阿ソン』したるものは瓦斯のまゝにては、或は呼吸器の粘膜を刺戟し、急性肺病等にありてはこの刺戟のため、却て脈衝を増すなどの恐れあれども、結局酸素は人の生命を保つに寸時もなくて叶はぬものたることは勿論、殊さら『化合酸素』の發生機に於ける化合力は最も強烈くして、(發生機作用のことは後に説くべし)人體に及ぼす効力極めて大なるものなれば、用方の宜しきを得るときは、天賦の良薬たる

○テ氏の製法
に基き大改良
を加ふ

らざるべからず。如何にもしてこの刺戟を去り、廣く何人にも、容易く使用せらるゝの方法を得ん事に苦心し、二三の同業醫士と協り、一面に於ては生理、病理、化學上より研究し、一面に於ては製法および分拆に従事し、爾來數年の間、研究に研究を積み、實驗に實驗を重ね、諸大家にも質し、遂にテナルド氏の製法に基き大に改良を加へて完全なるものを製造することを得、之を病者に應用したるに、自ら驚くまでの實効あるにより、爰に始めてこれを公けにするに至りたり。さればこの治療法を實行するときは血液中に酸素を増加し、その酸化力を強烈からしむるが故に、血液を清潔にな

○此治療法の
効能

○真理の有
の世に
述べて

し、諸病の病菌を殺し、殊に肺病には最も特効ある治療法にして、脚氣、痲瘋質斯、其他諸般の血行器病、呼吸器病、消化器病、神経病、皮膚病、子宮、生殖器、膀胱、腎臟病、血液および傳染病等諸病の中治効あるもの甚だ多けれども、徒らに多くの病名を列べて萬能を誇張り虚名を衒ふが如き事を好まず、たゞ真理なりと信ずる所を有のまゝに述べ讀者をしてこの治療法が何故に病氣を治すの効能あるかの道理を充分に了解せしめんが爲にこの小冊子を著し、まづオキシダータの何物たるやを説き、何故にこれが人體に入りて病患を治療すの効ありや、その人體に及ぼす作用、その實効あ

る證據を擧げ、さてこの治療法は如何なる病氣に最も治効あるや、殊更治効ありと信ずる肺病の病理および肺病に治効ある理由、その他この治療法の適應諸病およびオキシゲータ使用法等につき、不文を顧す、條を追ふて左に之を詳述せん。但し科學上の術語等に慣れざる一般の人士にも解り易からんことを勉め、成るべく平易の言語を以て綴りたれども、幸ひに大方の一讀を得て、余輩の言語文章に取らず、たゞその道理を會得ありて、これを事實に徴し、この治療法の奏効を實地に試みられんには、誠に余輩の幸のみにあらざるなり。

第二章 『酸素』の説明

○酸素は空氣中の一元素

○空氣は地面を距るに隨ひ稀薄なる

『酸素』とは我々が呼吸する空氣を形成する一元素にして、空氣百分の中二十一分を占め、動物の生命を保持つに片時も缺くべからざるものなり。さてその空氣が、地球を包圍むところの厚層は地面より凡そ二十里に達すと雖も、地面を離るゝこと遠ければ遠きは稀薄くなるが故に、極めて高き山に登るときは呼吸するに困難を覺ゆるがごとき、或は鐵山などにて深き穴を掘るに當り、空氣の流通あしく稀薄くなりたる時は、忽ちその中にて動作をなすこと能はざるに至る、これみな空氣中の酸素が不足するが故にて、空

○人生に空気が必要なるは、其中に含み居る酸素の必要なるが爲

気が動物の生存に必要なは、恰も魚の水を離るゝこと能はざるが如しとは、人の日常實驗するところなれども、斯く空気の必要なるは、たゞその中に含み居る酸素を要するがためにて、空氣中他に必要なるものは更になし。若し酸素を携へて深き穴に入り、または高き山に登るときは、毫も空氣の稀薄きを感じざるはその證據にして、寸時の間たりとも酸素の供給を缺くときは、我々の生命を保つこと能はざるに至るべし。この故に始めて酸素を發見せられたる當時にありては、未だ酸素といふ名はなく、『賦命氣』乃ち『生命を賦へる氣』と名づけたるほどなりき。而て

○酸素發見の當初は賦命氣と名づく

第三章 オキシダータとは何ぞや

○オキシダータとは化合酸素にして遊離酸素よりも一層効力あり

オキシダータとは『化合酸素』にして、化合したる酸素は普通に遊離れをる酸素よりも一層酸化力強く、その効力著しきものなれば、左に聊かその理由を説明し、且つその製法に改良を加へたる所以を述べんとす。

○物質化合の原理

總て物質を細かに分ち、愈々分ち愈々小分してその極に達するとき、その本質を失ふにあらざれば、最早細かに分つこと能はざるに至る、この最小分を『分子』といひ、分子もまた微細に分つことを得て、之を『原子』といふ。原子は常に同じ元素または異りたる他の元素の原子と化合し、或る物

體の分子を形成りをれども、原子のみにては獨立して遊離
れをること能はず、必ず他の原子と相互に牽合ひて結合く
ものあり。斯く原子と原子と相互に牽合ふ力を「親和力」
といひ、其親和化合する力は甲物と乙物とにより互に強き
と弱きとの相違ありて、その強く化合したる分子は容易に
分離れることなけれども、弱く結合きたるものが他の親和
力強きもの(甲)に接するときは、忽ち分離れて更にこれと結
合き新たなる物體(乙)を形成り、今まで結合きをりて殘され
たるものが壞れずして或る物體の分子を保ちをる時は、獨
立して遊離れ居ることを得べけれども、若し分解れて原子

用○「發生機作

となりたるときは之もまた他の親和力強きものと相牽て、
更に或る物體(丙)を形成るべし。斯く分離れて更に他のも
のと結合する時に起る作用を「發生機作用」といひ、この離
合の瞬間には化合力最も強烈く、その効力殊に著しきもの
なり。

○「酸素」を
「阿巽」との相
違

而して普通の「酸素」の一分子といふは、酸素二原子より成
立ち居るものなれども、酸素三原子が一分子となりたるも
のを「阿巽」といひ、この三原子の中一原子は普通の酸素に
加はりて弱く結合きたるものあれば、阿巽が他の酸化すべ
きものに接するときは、この加はりたる一原子は忽ち分離

○オキシダ
タは「阿罪」を
同一の原理に
由り化合した
るもの

れて他のものと化合し、残りたる二原子は普通の酸素の一分子を保ち、獨立して遊離せる事を得べし。斯のごとく「阿罪」は同一の元素と「弱く」化合したるものにして、オキシダ―タは他の元素と「弱く」化合したるものあれば、共に「化合酸素」たるに於て毫も異るところなく、普通の酸素は通常の温度にありては其化合力甚だ微弱きものなれども、「化合酸素」が分解れて他のものと結合く瞬間の「發生機」にありては、その化合力最も強烈くして、その酸化力甚だ鋭く、空氣中に分解れては其中に含める諸種の夾雜物を酸化し、諸物の腐敗を防遏ぎて空氣を清潔になし、吸入せられて肺

○「化合酸素」の主効

○「阿罪」の天然に發生する量は僅微なる

○「阿罪」は水に溶けがたし

中に分解れては血液を清良にし、血液中の酸素を増し、消化液の分泌を遊し、體內に行はるゝ化學的作用を盛にし、諸種の病菌を撲滅すなど、その効の大なることは章を追ふて説明するがごとくにして、これ「化合酸素」が遊離酸素よりも効力著しと云ふ所以あり。

さて「阿罪」のごとき「化合酸素」の天然に發生する分量は、後に述ぶるがごとく、極めて僅少なるものにて、藥用に供すべくもあらざれば、人力を以て之を製造せんには、まづ酸素瓦斯を精製しこれに電氣の力を興へて化合せしむるの外なければども、元來この瓦斯の多量は水に溶解がたく、左りと

○「化合酸素」の製法

て瓦斯の儘にては甚だ不便にして、廣く一般の使用に供するに能はず。然るにテナルド氏の創製めたる「化合酸素」の製法は、酸素をして薬液中に他の元素と化合せしむるの法にて、前に述べたる如く化合の原理に於ても、作用の効力に於ても學理と實驗とによるも、天然の「阿巽」と同一の治効あるは勿論のことたれども、同氏の法によるときはその酸素は漸次に分解れて空氣中に逃逸り、使用中永く液中含有蓄をること難く、これを抑止んがため同氏の用ひたる藥材は人體の吸入に適せず、その他藥用となすには多少の夾雜物あるの恐れあれば、主に帝國大學教授藥學博士下山順一

○テ氏の製法に人體の吸入に適せず

○容易に分解して逃散す

○刻苦して遂に精製するこゝろを得たり

○空氣中有効性の粹を集めたると同じ

郎君に質し、その他二三の藥學士の協力を得、刻苦して遂に同氏の法を改良し、酸素の逃逸ることなき製法となし、藥用に適せざる夾雜物を拆出し、全く人生に有効の性分のみを含またる液體となすことを得て、テナルド氏の製法には大改良を加へたるものなり。されば此オキシタータは取りも直さず、空氣中有効の性分の粹を集め適宜く調和して製したるものと同じく、空氣中にありては窒素五分の四に酸素五分の一の割合あるを、その不要のものを除き、更に酸素の分量を多くして濃密ならしめ、且つ瓦斯體のものを液體となしたるものといふべく、何人にも使用に便利にして普通の

○薬材にあら

製薬にあらざるは猶ほ水または空気を製薬といふべからざるが如く、世の賣薬などゝは大に異なる所のものなり。

第四章

オキシダータは何故に病を

治すの効能ありや

○三様の作用

これ最も細かなる説明を要する問題にして、オキシダータが肺臓に入り如何に働くかは、生理上、化学上、錯綜たる説明を要することなれども、成るべく簡単に述べおくべし。

オキシダータが病氣を治すに三様の作用あり、これを別々に證明せば、

第一節 器官的作用

○内外呼吸

にて、肺臓は人體の一つの器官にして、或る分量の空気を吸ひて直ちにこれを呼吸し、我々の生命の存在かん限りは絶えず空気の出し入れ即ち吸息呼息を繰返すところの働きをなすものなり、是を『呼吸』といふ。呼吸には内外の別ありて、全身の皮膚もまた呼吸をなすものなるが故に、之を『外呼吸』といひ、また血管の中に存留れる酸素が人體の組織の中に吸収まるゝ働きありて、肺の呼吸と共にこれを『内呼吸』といふ。此働きに就ては後に述べべけれども、まづ呼吸の主なる肺臓の働きにつき説明せん。肺臓は胸腔にありて左右の二葉に分かれ、心臓と大血管と

○肺の構造

○肺の氣胞

を包み、その實質は海綿のごとく伸縮の力ありて、呼吸するに當り、吸息の時は伸びて脹れ、呼息のときは縮まる様に出來をる構造なり。その内部は『氣胞』といひて、空氣の受器たる細かなる囊の如きもの數限りなく聯り合ひて成立ち、(第一、第二、第三(甲)圖を參看あるべし。)天然の有様よりいふときは、この無數の氣胞の一箇一箇が各々別々に、適量の空氣を攝取るゝ装置にて、人體の健康を保つには最も必要の働きのなり。

肺臓の構造は斯く微妙不可測なる装置にして、人間創造めより自然の儘永遠に其働の自由を保ち居りしならば、肺臓

○不自然なる肺臓の束縛

○衣服裝飾職業等の爲肺の働きを害する

○自由に肺の働きを害するの世に稀れ

は常に健全なる機能を有ち、世の人は限りなく無病息災の幸福を享くべかりし道理なれども、人文の進むに隨ひ、衣服または身邊の裝飾のため胸膈を緊縮めまたは帶を堅く締むるが如き、或は職業上止むを得ずして、常に空氣の流通あしき室内に呼吸するもあつて、或は常に身體を屈曲めて仕事するもあつて、その事情様々にして擧げて數ふべからざれども、世間一般の風俗習慣または職業のため、肺の働きを妨げ、天然のまゝ自由に呼吸することを得るものは、世間に殆ど一人もあかるべし。斯る事情により、一箇一箇空氣を攝取るべき肺の氣胞は、たゞその中にて空氣を受け

○氣胞の萎縮

易き所にあるものゝみ能く働き、これより遠りをる氣胞はその口を閉ぢて空氣を攝取るゝ力を失ひ、次第にこの『閉塞』を傳へて止まず『氣胞の萎縮』となり、遂には習慣性となり、遺傳とありて子孫にまでもこの弊を傳ふるに至り、内部の有様は眼にこそ見えぬ、大なる不具者といふを得べし。我々が常に呼吸するに當り、氣胞の働きを順序よく保たしむる力は隔番に空氣を出し入れする器官的作用によることなれども、自然の作用は遂に永き間の習慣を破りて、氣胞の萎縮を止むること能はずして、その働きを失ひたる氣胞を治療せんがためには、恐らくオキシダータの吸入法に勝るも

○内部の有様は眼に見えざる不具者

のあらざるべし。

○器官的作用に二重の効能あり

○故意的呼吸

オキシダータの治療法が、病を治す器官的作用に二重の効能あり。その一は、故意的に深き呼吸を続けなすことにて、或る大醫はたゞ屢々呼吸せしめて治療上の補助法となし、これのみにてさへも肺勞を治したることありと云へり。また或る神道家の中には、早起して太陽の昇るを拜しながら、暫くその氣を吸入して、身體の健康を祈り、毎朝怠らざるときは、終生病難を免るべしとて之を行ひ、大に太陽の御利益を得たりとなすものあり。これらは一種の迷信より出るの説たれども、實はこゝに在る『故意的呼吸』の効果ならざ

○況や多量の酸素を吸入するに於てをや

○氣胞と酸素との關係

るべからず。斯くたゞに故意的呼吸をなしてすら効能ありといふに、況てや多量の酸素を含みをもを吸入するに於てをや。

抑も肺と酸素とは、人間造化の創成より天意の然らしむる所にや、殊さら強き力を以て相互に牽合ふ様に造られたるものと見え、酸素の原子は自然にその受器たる『氣胞』の中に誘導せらるゝこと、他のものよりも容易くして且つ速かなり。故にオキシダータを吸入するときは、その酸素は他の元素と結合きたる力甚だ弱く常に分解んとする傾きある程のものなれば、肺に入りては忽ち分解れ、『發生機作用』を

起して氣胞に入込むがゆゑに、普通に遊離せる酸素よりも効験の著るき道理あり。されば故意的呼吸のみにてさへ効果ありといふに、多量の酸素を吸入し、殊に他の元素と化合したるオキシダータを吸入するに於ては、二重の効能ありといふ所以あり。

器官的にオキシダータ治療法の効能あるは以上述べた所に於て明かなりといへども、尙は一層緊要なるは『化學的作用』にして、之を(一)呼吸器に於ける作用と(二)消化器に及ぼす作用の二つに分ちて説明すべし。

第二節 化學的作用

○吸息したる
空気が呼吸の
時分は減じ性
分異なる

(二)呼吸器に於ける化學的作用

我々が呼吸するに當り、吸息みたる空氣をそのまゝ呼息すがごとく思はるゝと雖も、呼息するときのものは吸息みたる時のものとはその性分大に異り、且つ分量をも減じをるものとす。乃ち吸息みたる空氣の五分の四を呼息し、その性は多少の炭酸瓦斯を混じたる窒素となりて出で來り、残れる五分の一が即ち肺臓に吸収まるゝところの酸素の分量なり。さてこの酸素が體內に入りて、如何なる動きありやといふに、その主なる職分は血液を清潔ならしむるといふに外ならず。

○心臓

○肺と心臓との關係

○退行變性産物

この清潔法の行はるゝ順序として、まづ心臓のことを記さん、心臓は前にいひしごとく、二葉の肺臓の中間に介在りて、内部は左右の二部に分れ、その一部は全體より不潔となりて歸り來るところの血液を受けてこれを全體に送り出すところなり(第一、第二圖を參看あるべし)。さて血液が清潔にせらるゝ次第をいはゞ、斯のごとく心臓より送り來る血液はその色暗紅くして、炭素および體內にて不用となりたる組織、細胞その他『退行變性産物』といふ諸種の汚物を混じたる、甚だ不潔となりし血が肺にいたり、氣胞が攝取れたる空氣に接しとき、空氣中の酸素は直ちに血の中にある

○肺臓は化學
室にして心臓
は二種の血を
取り次ぐ運送
問屋

炭素と化合して、炭素瓦斯といふ氣を生じ、この瓦斯は直ちに肺に出で、前にいひし窒素に混じ、呼吸のときに體外に呼吸さるゝものなり。こゝに於て血液は清潔となりて深紅色と變じ、心臓の他の一部に返り、この所より人體全部に輸送まるゝなり。されば肺臓は酸素の力により、必臓より來る不潔の血を清潔となして、これを心臓に送り返し、その汚物をば瓦斯とあして體外に捨るところの化學室にして、心臓は恰もこの二種の血を取次ぐところの運送問屋に異ならず(試に、不潔となりて返り來る、ところの靜脈管より取りたる血を、純粹の酸素を入れたる硝子瓶の中に入れ振盪

○内呼吸

すときは、その血の色深紅色となりて、動脈管の中にある清潔の血と同じ色となるべし)。この理によるときは、病體をして健康體に復らしむるに、充分の酸素を供給ふときは、之が如何に働きて病氣を治すに必要なるかは、自から明了となるべし。
抑も人の身體の血管は大血管より漸次に分岐れて、末にいたるに随ひ細くなり、終には毛細管とて毛筋のごとく細きものとなり全體に行渡り居りて、この血管内にも内呼吸とて、血液の中に含まるゝ酸素の作用により、組織の中に生じたる汚物を酸化してこれを毛細管に吸収み、その血、暗紅

○空氣の不潔

色となりて心臟に返り、次で肺臓に輸送られ、前に述べし如く、酸素に會ふて體外に排泄するなり。斯のごとく組織中にありても、常に清潔法を實行しつゝあるべき筈のものなれども、己に述べたるごとく、世の文明に進むに隨ひ、人爲の風俗習慣等により、肺の自然の儘の働きを束縛せられ、健康上必要丈の充分なる酸素の供給を受け得ること能はざるもの多きのみならず、常に我々が呼吸するところの空氣中に含みざる酸素もまた天然に定りたる分量よりは、時ど場所とによりては大に不足し居るの事實あり。原來空氣の性分は窒素五分の四にして、酸素はその五分の

○空氣中の酸素缺乏

一を占め居るべき筈なれども、是は海上または草木多き山間(草木は、動物が酸素を吸収みて炭酸を呼吸すに反し、炭酸を吸収みて酸素を放散すがゆゑに、草木の生活は空氣を精良にして人類を益すること大なり)等にありて、本來清潔なる空氣の性分あれども、人家稠密、人口繁多の場所にありては、飲食物の煮烹のため、或は製造場、工業場等に於て薪炭を燃焼すなどにより、多量の酸素を消費して炭酸を發し、また塵埃多く、或は汚物の腐敗等により「アンモニヤ」を生じその他最も恐るべき有機物を含み居ること少からず、されば是等のものを酸化するがため、酸素の分量を減じをるの

○不潔なる空
氣の害悪

みならず、斯のごとく種々のものが空氣中に混じをるがため、人生を害することの幾許なるを知らざるなり。而して世の中開け人文進むに隨ひ、斯く空氣が不潔となりゆく程度も益々甚だしかるべき道理にて、恰も山間にて人煙稀れなる所の空氣は清かなるも、都會にありては甚だ不潔なるを以てもこの理を知るべきなり。斯く炭酸瓦斯の混じをること仮令僅少の分量にても、空氣中に『阿罪』の發生するを妨げ、且つ空氣中に炭酸瓦斯を含むこと僅々一萬分の六の少量にてすら、已に人類の呼吸に害ありといへり。さてまた「アンモニヤ」は空氣中の有機物

○空氣中の有機物

が窒素と化合して、その分解より生ずるものにして、既に毒物なりとして人の知れるがごとく、人生に害あること勿論殊に空氣中に夾離れる有機物の恐るべきは衛生家の片時も注意を怠るべからざる事柄たり。試に日光の透射むところを日陰より見るときは、無數の微細なる塵埃が空氣中に浮動さるを見るべし。勿論この塵埃盡くが有機物にはあられざれども、その中には多くの有機物混じをりて、これが腐敗分解して悪き瓦斯となり空氣中に混じをりて、下等動物の胚種を發生し、常に諸物の醱酵、腐敗の傳播を來すは皆これが爲あり。若しこの瓦斯を除去りたる空氣中に

○空氣中に於ける「バクテリア」の生活

飲食物なぞ貯へおく時は、長き間決して腐敗することなきは、罐結となしたる諸種の食物の腐敗せざるを見ても明かなり。さて有機物とは微、酵母、「バクテリア」等にて「バクテリア」の中にも、人體に入り病氣を起すの力あるものと、然らざるものとの二種ありて、微の萌芽は片々になりて空氣中に浮動びをり、また「バクテリア」は小き群をなして空氣中の塵埃に附着きをりて、共に人の呼吸により體內に入りて種々の病氣を惹起すものあり。これを人體に運搬するものは實に空氣中に浮動びをる微細なる塵埃にして、この塵埃は諸種の病原を人體に運送する無敵究強の輻重兵と

○空氣中の塵埃は細菌を人體に運搬す

いふも可なり。而してこの塵埃は屋外よりは室内に多く、雨天よりは乾燥きたる天氣に多く、風吹くときは殊にその傳播を選ふするものなるが故に、空氣中の塵埃こそは實に人生の大敵といふべけれ。

○酸素不足の害

若しも我々の肺臟が空氣を呼吸するに當り、器官的作用の不完全なるがため、充分なる酸素を吸入すること能はざるが上に、空氣中の酸素もまた稀薄くなり居るものとすれば、愈々酸素の不足を生ずるのみならず、斯く空氣中に混じる諸物質が人體に及ぼす害毒は酸素の不足によりて益々その勢力を選ふするに至るべく、況して病氣ある人は健康

○毛細血管中に酸素の存する人は稀れなり

の人よりも多量の炭酸を排泄するものなれば、随つて一層多くの酸素を要し、猶更その供給不足するが故に、血管内に存留りて、前に述べたる内呼吸の作用をなすこと能はず、獨國にて大醫の實驗によるも、毛細血管の中に酸素の存留れる人は極めて稀れありとのことあり。これ肺が呼吸のとき、酸素を攝取る分量不足して、血管内にありて入用なる酸素を除しおかざるがためなり。斯く生命を保つに大切な酸素の呼吸に不足ありといふことは、たゞに血管中に入用なるものを除さざるのみに止まらず、これがため却て汚物の清潔にせられざるものを残すにいたり、我々生涯の幸

○肺はその職分たる血液の清潔法を終らす

○清潔法を終らざる血液の存する原因の病

福を害すること幾許なるを知らざるなり。元來肺臟は血の中の炭酸を溶解して、これを體內より除き去らんがため、絶えず出來得る限り多量の酸素を供給はんと勉めつゝ、あるべきものなれども、上來述べるところの理由により、その動き充分ならず且つ空氣中酸素の不足等により、その職分たる血液の清潔法を全く終らずして、汚れたる血を再び身體の中に送り返すときは、血行を障碍ぐることを勿論にして、身體の活動力を害するの大原因となり、體內より排泄らるべき組織細胞などの不用となりし汚物、積りくゝて不潔となりたる血が或る分量を超ゆるときは貧血、萎黃病、白血病、

腐敗熱等のごとき血毒病を惹起し、且つ諸病に侵され易き誘引となること必然なり。されば血の中なる汚れものを溶解してこれを排除し、且つ空氣中に混じをる諸害物を撲滅する動きの源たる多量の酸素に富む所のものを體外より供給ひ、速に健全なる身體に復らしむるの急務たるは今さら多く云ふを要せず。

(三) 消化器に及ぼす化學的作用

以上は呼吸器に於ける直接の化學的作用につき述べたるなれども、この外に尙ほ消化器に及ぼす化學的作用あり(第四圖を參看あるべし)。聊かこれを説明し置かざるを

○唾液消化

得す。
まづ我々が食物を消化しその營養を受くるの有様を説かんに、消化器が食物を消化する方法は唾液消化、胃液消化、腸液消化の三種あり。

唾液は總ての澱粉質を糖化する作用ありて、米麥その他の穀物蔬菜類を咀嚼く際に、口内に分泌る唾液と混和し、その食物中の澱粉質を糖分に變化し、腸に至り容易く吸収せらるゝ性分となすものなり、これを唾液消化といふ。

○胃液消化

胃液といふは胃の中に分泌る液にして、主に鹽酸および「ペプシネ」といふ性分のもを含み居りて、これ等の作用に由

○腸液消化

り總ての肉類、鶏卵、または大豆などの中に多量を含み
 る、鶏卵の白蛋の質に似たる蛋白質といふものを、「ペプト
 ン」といふ性質に變化せしめて溶解やすき性分となし、腸に
 至り吸収され易くなす、之を胃液消化といふ（胃液中の鹽
 酸が殺菌の効あることは後に述べし）。

腸液とは、主にリーヘルキューン氏腺といふ腺より腸の中に分
 泌る液にして、唾液が口中にて澱粉を糖化するに充分な
 らざりしものを更に糖化せしめて、その消化を完全ならし
 むるものされども、尙ほ一層必要なる作用は、腸内に分泌る
 肝臓の分泌液乃ち胆汁、および脾液といふ脾臓の分泌液の

○胃液中の鹽酸は殺菌の効力あり

二種が相伴ふて、胃中にて蛋白質の消化不充分なりしもの
 を補ひ、一層完全なる消化とせしつゝ、更に脂肪を消化し乳
 化といひて乳のごときものとせし、牛乳の濁りをるはそ
 の中に多量の脂肪が小さき球形となりて別れ散在をるに由
 る（吸収に容易ならしむる大切の作用をなす、これを腸液消
 化といふ）。

殊に注意を要するは前にいひし胃液中にある鹽酸にして、
 胃が健全にして常に鹽酸の分量適當なるときは、結核桿菌
 または虎列刺病菌のごとき「バクテリア」を、食物または唾液
 と共に嚥下することあるも、鹽酸の作用により胃の中にて悉

○「コレラ」菌
嚙下の實例

く撲殺さるゝものあり。有名なる例は、獨逸の大家ペツラ
ンコーベル氏が、多量の虎列刺菌を飲みたるに何の感應もな
かりしが如き、また之に反し、犬のごとき數多の動物に「アル
カリ」を與へて胃中の鹽酸を中和したる後、虎列刺菌を飲ま
しめたるに、その動物は總て虎列刺病に感したるを、屢々
試験したる結果、疑を容れざる所なりといふ。

○消化液の中
一種たりとも
分泌不充
分ならば
消化不良
さふる

斯くのごとき、消化器の作用は諸種の分泌液ありて、我々が
日々に食するものを滞りなく消化すべきものあれども、そ
の中一種たりとも分泌すること充分ならざるときは、これ
がため「消化不良」となり腹痛、下痢、便秘、嘔吐、衰弱、等を起

○日本人には
胃病者多し

し、その反射作用として痙攣、頭痛、眩暈、記憶減弱、全身倦怠
などの症加はり、別けて鹽酸の缺乏するときは食道より入
込む諸種の細菌の繁殖を來すの恐れあり。殊に我々日本
人は社會の風習にて日常生活の有様不規則なる事情等よ
り、概して消化器の不健康あるもの多ければ、最も注意せざ
るを得ず。若しまた諸種の消化液が夫々適當の分量を分
泌し、その調子が能く整ひをりしならば、世人の常に恐るゝ
腸結核、腸窒扶斯、虎列刺病などの感染も左まで懸念するに
及ばざるべし。而てこの調子を整ふるには如何なる方法
が最も適應きやと云ふに、恐らくはこのオキシタータ吸入法

○消化器には
血管の分布比
較的に多し

○血液中に酸
素多ければ消
化液の分泌を
増す

に若くものなかるべし。聊か其理由を述べ置くべし。

凡ての消化器には血管の分布他の臓器よりも、比較的によく、之に由て營養分を全體に行渡らしめ、消化器自己もこの血管より、營養を受くるが故にオキシダータの如き化合したる酸素を吸入し、その血液中に多量の酸素を含むときは、消化液の分泌を増加すること疑なく、獨逸のフォン、レーマン氏は此事につき精密なる研究をなし、『阿巽』の吸入により總ての消化液分泌の分量が増加することを確めたり。從來實驗したる人の能く知る所なれども、オキシダータ吸入の後必らず食欲を促すの感あるはこの道理に由るものにて、常

に運動不足の人、消化器病に犯される人、衰弱せる人等にしてこの治療法を行ふときは、食物の營養分を悉く消化し盡し、營養を完全ならしむるが故に、速に健全なる人となるは理論のみならず、實驗によるもまた明かなり。

第三節 神経に及ぼす作用

神経に及ぼす作用を述ぶるに就ては、身體の神経系統につき細かに説明せざるを得ざれども、餘り煩雜に涉り却て明了を缺くの恐れあれば、爰には極めて簡単に説明せん。

我々の頭蓋骨の腔中に充實たる脳と、これより下方に延長して脊柱の管中を填塞きたる脊髓とより成れるものを、脳

○神経系統

○神経の鋭敏なるは電氣の作用との説

脊髄系統といひ、之を神経系の中樞部となす。また頭蓋より始まり胸部、腹部、脊柱の前側を経て尾椎骨に至る人體の大腔内にありて、脊髄神経系の如く兩側對位をなせるを交感神経系といひ、各節より分岐れ、極めて錯綜混雜したるものにて、之を神経叢といひ、腦脊髄中樞より漸次に細分れて末梢神経となる。斯く分岐くして緻密となり人體全部に行渡りをりて、腦は思慮、感覺、智識、精神の本部にして、總てこれより命令を人體各部に通じ、その迅速なること驚くべく、その作用の奥妙なるは日常人の能く知るところにして、心理學者、電氣學者はこの働きを電氣の作用といへり。さて

○血液は神経實質を養ふ

○血液不潔營養不充足は精神を鈍さる

○清潔なる血は精神を快活さる

また各部の神経實質は總て薄き膜にて蔽はれ、この膜には無數の毛のごとき血管ありて、總ての神経の實質を營養ひ居れり。前に述べたるごとく血液不潔あるときは、この毛細血管より腦の實質を養ふこと充分あらざるが故に、自ら神経の働きに影響を及ぼして腦衰弱を起し、隨て精神痴鈍となり、遂に事に堪ゆること能はざる人となるべし。これに反し清潔なる血液を以て腦の實質を養ふときは、腦は益々豊肥にして、これに宿るところの精神もいよく活潑となり、思慮深く、感覺鋭敏く、忍耐つよく、智力増大して、常に爽快き人となるべし。且つまた神経の働原は電氣の作

○血液が酸化作用を起す瞬間に電氣作用を起すの作用

用なりとの説を確實ありとせば、精神の活動を盛ならしむるの一原因は實に酸素の力にありといふを得べし。抑も血液が酸素に遇ふて酸化の作用を起すに當りては、その變化の瞬間には必ず電氣作用を起し以て化學的働きをなさしむるものなりとの説は、最近の生理學者、電氣學者の唱ふるところなれば、酸化力に富むところのオキシタータを吸入し血液の清潔を計るは、たゞに腦の實質を健全にするのみならずして、精神の働きに活動を與へて、身心ともに益々健全なる人となすに欲くべからざる治療法と云はざるべからず。

以上述べたる所によりオキシタータの器官的作用、化學的作用、および神經に及ぼす作用の三様に別ち、略その理由を明かにしたれども、斯く三様が別々に働くものにあらずして、オキシタータの吸入せられたる時は三様の作用が同時に働くものなれば、其効驗の著顯きことは勿論なり。

第五章 酸素の供給充分なる結果

若し我々の身體が充分なる酸素の供給を受くるに於ては、其血は多くの酸素に接し、これを奪ひて數分時間に身體全部に行渡り、人體總ての器官はこれによりて新しき活動を生じ、これと同時に彼の諸器官の活動を妨げ不活潑となす

○酸素充分ならば諸器官新らば活動を生ず

○体内の汚物を排泄し、盡す時は其場所を充す爲に食欲を促す

○物質の同化

○新陳代謝

べき害物、乃ち体内にて組織、細胞の不用となりしもの、および退行變性のため生ぜし産物を溶解して體外に排泄し盡すときは、これに代りてその場所を塞ぐべきものを要するに至る、これ食欲を生ずる所以なり。こゝに於て消化器官の働きも益々完全となり、『多く』の食量を『速に』消化して、『多く』の營養分を製造するに至り、人體の各部の諸器官はこの營養分を受けて、『物質の同化』といひて各部の物質と合し新しき組織となり、漸次に古きものと交代す、これを人體に行はる、『新陳代謝の法』とは云ふなり。斯く總ての器官の働き益々活潑となり、新舊の交代迅速なるときは、人

○彈力および反撥力

○諸器官運動の整備は人生無上の幸福

身全體の經濟上、血液中に生ずる有毒物の重荷もその量を増して、これを除かんがためには更に多量の酸素を要し、隨て猶々多量の滋養食物を要するに至ること理の當然といふべし。こゝに於て人體の生活力いよゝ盛となり、精神の能力も強大なりて、心身とも自然に彈力を添へ、反撥力を加ふるが故に、前にいひたる空氣中に混じをる諸物質の害毒も諸種の勢力に妨げられ、遂にその害を内部に及ぼすこと能はざるに至るべし。斯のごとく全體更新りて、諸器官の働き活潑となり、またその『反應』となり、『排泄』となり、『同化』となり、各々相助け合

ひて、『新陳代謝の法』滞りなく行はれ、諸器官整備ひて、健全力の永續するに至るを人生無上の幸福とこそはいふべけれ。この幸福なる有様に達せんとするには、充分なる酸素を供給ふの外に道あかるべし。こゝに於てオキシダータのごとき酸素に富みたるものを吸入せば、その器官的および化學的作用あるのみならず、神経にまで及ぼす作用に於て、如何にこの治療法の効能あるかは自から明かならん。

第六章 オキシダータの實効ある證據

オキシダータまたは『阿巽』のごとき『化合物素』が普通に遊離れるる酸素よりも殊に効能ある所以は、第三章に述べし

○天然に發生する『化合物素』の僅少

○『阿巽』の發生する事情

ごとき、容易く分解れて發生機に於ける酸化力の強烈さが爲にて、その効能は爰に再び繰返すの要なかるべし。元來『阿巽』のごとき『化合物素』は空氣中にも天然に混じをるものなれども、その分量は甚だ僅かにして、空氣百「リトル」(凡五斗五升)の中に僅に一乃至十「ミリグラム」(凡を目方二弗六八乃至二毛六弗八餘)を含みをりて、雷の鳴るとき、又は水蒸氣の立のぼる時、又は松樹より出る樹脂よりの列並油の氣を發し、この氣太陽の熱に遇ひたる時なぞに多く發生するものなるが故に、雷雨劇しくして晴渡りたる時は、何となく爽快く感せらるゝは誠に少量ある此『化合物素』

○海邊又は山間に病氣を養ふて効能ある理由

○獨逸に行はるゝ空氣療法

を呼吸するが爲なり。されば世人が海邊又は山間に病氣を養ふ時は其治効ありとて、思ひく其地を選び出養生をなす者の多きは、海面若くは樹木より生ずる「化合酸素」を呼吸するが爲にして、殊に關東にありては逗子、鎌倉、大磯をはじめ駿相の海邊、關西にては須摩、舞子、明石のとき松樹多き海邊に療養するもの多きは、的列並より生ずるものと海面より生ずるものと、自然にその量多かるべきを以てなり。また獨逸國フオーゲルザング、フリードリッヒスハイム、コックトプス、ゲルベルスドルフ、グラボースゼー等にありては、松林の中に一大病院を設け、呼吸器病者を之に収容めて、空氣療法

○天然に發生する僅少のものも、その状況や濃厚のものなや

のみによりて治療をなし、近來大にその治効顯れたりといふ。斯のときく自然に生ずる僅の「化合酸素」を呼吸してすら、その効驗著現きは人々の實驗するところなるにオキシダータのときく濃厚ものを居ながら呼吸するに於ては、その治効幾倍なるを知らざるあり。殊にこの吸入は如何なる他の藥用または治療法たりとも、道理あるものならんには、これを併せ用ひて衝突することなきのみならず、之を補助法として大に他の治療法の治効を全からしむること疑ひあるべからず。故に海邊にあるひは山間にその他温泉場など、空氣清らかなる所に靜養しながら、之を用ゆる時

○歐洲諸大家の實驗說

はその効殊に著るしかるべし。こゝに歐洲諸大家の實驗說二三を左に抄出して、參考に供ふべし。

○グスネル氏

グスネル氏はスワットガルトのルドウヒスビタールに於て、佛國に行はるゝ『阿巽吸入法』を肺結核患者に用ひて良成績を得、近來佛國のフェルネット氏も亦甚だ有効なりとして大に稱用せり。

○フェルネット氏

リング氏は近來「チフテリー」、猩紅熱、及び結核に用ひて好結果を得たり。

○リング氏

○ピンツ氏

ピンツ氏の研究は大に學界を賑はし、ブランケンブルグのアイ

○アイゼライン氏
○スターベル氏

ゼライン氏及びクロイツナッハのスターベル氏も此研究に従事し阿巽を適量に混じたる空氣は神經性刺戟症、神經衰弱、不眠症(殊に小兒の不眠症)に用ひて良成績を得たり。

○レンデル氏

レンデル氏は『化合物素』が空氣を清潔にし、傳染毒撲滅の作用あり、腐敗微菌等を殺す効あるを以て、初て阿巽水と名るものを製し、結核、關節「リユーマチス」、綠内障、喘息、「マラリヤ」等に用ひ又シミット及びステルン氏は癌腫の實質中に注入したり。

○スミット氏
及びステルン氏

○レンチー氏

ネアベルのレンチー氏は『化合物素』を十三名の肺結核患者に用ひ、尿の酸性を増し、全體の營養大に恢復したり。

○上來述べし
所を一括す

第七章 結論

上來述べしところを一括していふ時は、酸素は萬物の中これを含みをらざるものは殆どこれなくして、遇まこれあるも甚だ稀れなる程に廣く存在し、天然物の中最も効用の廣きもまた酸素に若くものなかるべく、我々動物は酸素を呼吸するを以てその生活の力を保続け、體外にありては空氣を清潔にし、體內に入りては血液を清良にし、寸時もなくて叶はざる貴重のものたるは云ふまでもなきことなれども、世の文明に進むに隨ひ、風俗習慣および職業等種々様々の事情のため、酸素を攝取する唯一の器官たる肺臓の働きをし

て自由ならしめず、遂には習慣性となり肺の氣胞萎縮りて、生活上用丈の酸素を攝取ること能はず、之が爲に肺臓に於ても、亦血管内に於ても（内呼吸）、酸素缺乏して充分血液を清潔になすの力なきのみに止らず、却て不潔なる汚物を血液中に残して諸種の病氣を醸し、殊に病者は健康の人よりも多量の酸素を要するものなるに、之を供給する唯一の寶庫たる空氣中には炭酸塵埃、「アンモンヤ」、微、「バクテリア」等種々の夾雜物多く、是らを酸化する爲に消費せられ、其含む所の酸素の分量稀薄くなりて、我々生活上益々酸素の缺乏あるが上に、空氣中に混じをる是等諸種の物質

は何も人體に害を及ぼさざるものなく、此弊害は地方にありてよりも都會繁華の地にありて甚しく、社會の發達するに隨ひ生活上止むを得ざるの結果とは云へ、斯の如く自然の理法に戻りて、人體の器官的作用に缺典あるがため化學的作用充分ならず、延て神經の作用にまで及ぼし、人間諸般の疾病ある大原因は實に此缺典あるが爲の外ならず。斯る諸弊害を補はんが爲には酸素療法に若くはなく、酸素療法は一種の空氣療法にして、自然療法の中最も治効ある者と云はざる可らず。而てオキシダータは阿罪と均く『化合物素』たるを以て、容易く分解れて發生機に於ける化合力甚

だ強烈さがゆゑ、にその効能は普通に遊離する酸素の及ぶところにあらず、之を吸入するときは、酸化力強くして、管に血液を清潔にするのみならず、血管中に多量の酸素を存留し、内呼吸の作用を盛にし、諸種の「バクテリア」を殺し、諸種の消化液の分泌を増して食物の消化を助け、人身全體の『新陳代謝』を速かならしめ、前に掲げたる總ての缺典を補ひ、殊に肺病にありては直接にその局所たる肺の中に於て『發生機作用』を起し、その病原たる結核桿菌の隠棲に入込みて『殺菌』の働きをなすが故、之に上超す治療法なかるべく、如何なる他の治療法たりとも、その道理あるものならんに

は、この治療法と衝突すること更にこれなく、却てこの法を補助法となして他の治療法の成功を速かからしむること必然なり。以上は一個の人體に就いていふところなれども尙ほこれに述べおかざるを得ざる大切のことこそあれ。即ち室内の空氣を清潔ならしむるの法これなり。

○室内空氣の清潔法
○恐るべきは塵埃
○乾燥の空氣は病氣を傳播する理由

空氣中には、前に述べたるごとく、種々の有害物混じりて、その中最も恐るべきは「バクテリア」を運搬するところの塵埃なりとす。この塵埃は屋外よりも室内に多く、殊に雨天よりも乾燥きたる天氣に於て多きが故に、夏季炎天の候に當り、長く照り續きたる年は殊更ら病氣の流行多きは、空氣

○空氣中の塵埃は殊に室内に多し

○室内装置

○此装置は多數集會の場所に必要

中に濕氣なく、塵埃の飛揚甚しくして、病原を傳播ふること多き道理なるが故なり。取分けこの塵埃は室内に多しとすれば、常住坐臥に於てこれを防ぐの注意寸時も怠るべからざるは云ふを埃たざるべし。これに於てこのオキシデータを室内に装置おき、晝夜間斷なくこの液を蒸發せしめ、その水分を以て室内の塵埃に濕氣を與へ、オキシデータの放散により諸種の惡氣を酸化消毒し、「バクテリア」を撲滅さしめ、清かなる空氣を呼吸するの、便益ありて、この法は如何なる家庭にありても一日も緩にすべからざることたれども病室、學校、寄席、演戲場その他公會等多數集會の場所に

ありては殊さら必要の装置たり。さてまた病氣ある人は、斯く室内消毒の装置中に起臥しながら、このオキシダータを吸入せんには、居ながらにして山間または海邊の清かなる空氣中に静養しつゝこの法を行ふと異なる所あかるべし。

第貳編

第壹章

オキシダータの治療法は如何

なる病氣に最も效能ありや

○殆ど萬病に適す

上來大略説明したることく生理、病理、化學または心理上

○總ての呼吸器病

り考究したる道理より推すときは、今さら繰返すまでもなくこの治療法は殆ど萬病に效能ありといふを得べけれども、人の病氣の種類も種々様々にてその數少からざれば、一々に奇効ありとは俄かに斷言するを得ず。されば最もこの治療法の適應するものより擧げて説明せんに、總ての呼吸器病、殊に肺病にありては一日も緩にすべからざる治療法たるを以て、他の諸病に就ては後に略記するに止め特に肺病につきて左に説明せん。
世間に肺病に罹りて犠牲に供せらるゝもの、數は他の諸病にて斃るゝもの、數を合計したるよりも多く、且つ日に

○肺病の事

○肺病に斃る
者の数は日
に月に増加す

○流行病に斃
る者よりも
多し

○未だ必治の
良法発見せら
れず

月にその數を増加するは最近の統計に據るも明かなることにて、實に悚然せざるを得ず。一たび大疫流行し、一時に多くの人命を奪ひ去らるゝことあらんには、俄かに大驚惶を起し、その騒動一方ならざるべけれども、統計によりて見るときは肺病に斃るゝものゝ數は流行病に斃るゝものに比べて、年々殆ど數倍の數に上るにも拘はらず、これを豫防し、これを治療することにつきては、世人の注意すること深からざるの感あり。醫者にありては斯く恐るべき肺病の治療法につき是まで苦心するもの少からざれども、未だ必治の良法を発見せられたるを聞かず、誠に遺憾の限り

○二種の誤謬

○共に治療す
べき時期を誤
まつ

といふべし。且つこの病氣につき世人の考ふるところに二種の誤謬あり、その一つは遂に不治の病氣となし、自ら失望落膽して、たい姑息の治療法に依頼し、徒に死期の迫るを待つもの、他の一つは恰もこれに反し、左までの重患とも思はず、容易く全治り得べしとなし、自らその治療を等閑に附するものあり。この二つはともに治療すべきの時期を誤ち、殊に後者の誤謬に陥るものを多しとす。元より胃、腸、肝、脾などのごとく横膈膜以下にある諸器官の病氣は、これに耐ゆるの力弱くして、自ら覺ること速かなれども、横膈膜以上にある器官、殊に肺、心臓のごときは、疾患重大なる

も比較的ひかくてきにその病苦びやうくを自覺じかくすること輕きものなるが故ゆゑに、この疾患びやうの初期しうきにありては殆ど自ら知らざるもの多し、これ後者の誤あやまちに陥おちいる所以ゆゑんにして、長き月日つきひを経て始めて自覺じかくしたるときは既に遅おそくして、生命いのちの城砦じやうでは疾はやくに病患びやうといへる敵てきの重圍かぢみに陥おちいりたる後なり。されば一通り病理びやうりを明あきかにして豫あらかじめこの病患びやうの徴候ちやうこうを知り、なるべく速すみかに治療ちりやうに着手ちやくしゆするを以て肝要かんやうなりとす。即ち第一すなはにこの強敵きやうてきの襲おそひ來るを豫知よちし、第二だいににこれを防ふせぐべき良法りやうはふを求めて實行じちぎやうするにあり。

○肺又は心臟の病は苦痛を自覺すること

第貳章 肺病の徴候

○大敵の襲來する徴候に三種あり

○初期

○羸瘦

肺病はいびやうのごとき猛惡無慈悲まうあくむじひなる生命いのちの大敵たいてきも注意ちういを怠おこらざるときは、必ず前兆ぜんてうなくして來るものにあらず。この大敵たいてきの襲おそひ來る徴候ちやうこうに三期さんきあり。その第一だいいちは何なんの原因げんいんもなくして『羸瘦るいしゆう』すること、乃すなはち左ひだりしたる病氣びやうきありとも見みゆるに、筋肉漸次きんにくしんじに瘦やせ衰おとろふることあり。これは他の疾病びやうにより同一どういつの徴候ちやうこうあれども、他に特殊とくしゆの徴候ちやうこう伴ともなふを以てこれと別わかつことを得べし。乃すなはち肺病はいびやうにありては、頬ほと耳みみとの間あひだの筋肉きんにく、及び眼窩めのおなとも陷凹おちくはみて、斜なめに領あり耳みみにいたる筋肉きんにくはその周圍まわりの脂肪しぼうを吸収あしゆられて著いちじく凸起たかり、體量たいりやうを試こころむる時は甚はなだしくその量りやうを減げんするものなり。斯かくの如ごとく『羸瘦るいしゆう』

○小結節

○初期に併發せる病氣

○輕き咳嗽は大なるものよりも惡徵

を來すは營養缺乏の徵にして、このとき既に肺の組織の中に『小結節』を成形したるあり。またこれに伴ふに極めて輕き『咳嗽』あり。この咳嗽は自ら止めんとせば、止め得らるゝ程のものにて、心附かざるほどの極めて輕き刺激によりて起り殆ど自覺なきもの多く、時としては輕少の咯痰を雜ゆることあり。斯く輕き咳嗽は、却て血管も破裂したるかの如く思はるゝ、大なる咳嗽よりも幾倍あしき徵候にして、冬季風雪あらしきときも、また春季暖かなるときも止むことのあきは、肺の中に小結節の現在する證據にして、殊にその侵入の初期とす。この外貧血、慢性喉頭加荅兒、胃、

○第二期

○第三期

腸加荅兒または僂麻質斯のごとく、筋肉および關節の痛みあるひは肩および胸部に神経痛あるや、女子にありては萎黄病に似たる徵候ある等は往々肺病の初めに發することあり。第二期の徵候にいたりては『羸瘦』『咳嗽』など一層進歩して、『咯痰』も多く、僅の運動によりても心季亢進り、呼吸促進しく、全身に何となく倦怠を覺え、夜間に輕き熱を發し、時としては盜汗のため睡眠を妨げらるゝことなどあり。さて第三期の徵候の有無を看破すこと最も肝要なり。即ち注意して鎖骨(喉の下、胸の上に横はる凸起りたる骨)の直下に於て、筋肉の陥凹みをるや否を驗すべし。この病

○筋肉陷凹の理由

期にありては、筋肉の陷凹は他の病期のものよりも著しく深くして且大なり。これ決して他の病の爲に起るものにあらずして、この現象の原因は結核が通例肺の尖頭を侵したる後、たゞちに鎖骨の下筋肉を陷凹せしむるものにてこの結核が現存するため、その周囲にある肺の組織凝固りて収縮るがゆゑに、その上を蔽ふ組織は沈低ひに至る、これ鎖骨の下筋肉が陷凹ひ所以なり。斯くて尙ほ一事の伴ふあり。即ちこの結核は、初期にありては殆ど右左兩肺を侵すことおくれども、この病期にありては必ず兩肺を侵すものなり。斯くのごとく完備りたる徴候は、恰も疾患と

○兩肺の結核

○結核の存在は苦痛の感覺

○結核とは如何

いふ敵の旗幟にして、敵の兩翼すでに成り、旗鼓整々として我が領分内の要害の地を占領したるに異ならず。この結核は早くより存在するも、これを知覺るほどの著るしき苦痛もなく、また局所の感覺もなければ、豫めその存在を知ること容易にあらず。されば以上の徴候に就ては、尙ほ更らに詳しく説明を要するなり。

第三章 肺の病理

結核とは如何なるものなるや、これ肺の病理を説くに當りまづ了解し置かざるを得ず。結核とは、人體不健康の事情により固結りたる淋巴腺様のものにして、粟粒大の球の状

をなし、乾酪質にして肺の組織中に混在れり。若しこの天然のまゝの形状にて、且つその數も餘り多からざるに於ては、比較的^{比較的}に大なる害とはならざるべく、迅速に治療をさすときは、漸次に萎縮りて遂に肺の實質中に吸収され、外部に排泄かれて、復その跡を留めざるに至るべし。これをなすは乃ちオキシダータの職分にして、他にこれに代るべき働原あらざるべし。

○其數を大に増す

さて肺の病勢ますます増進むときは、彼の結核はその數に於ても、その大さに於ても、いよく増殖へて、時としては小さき葡萄の簇房のごとく集合り、または一個にても充分

○焮衝

○腫瘍

○化膿

○膿瘍

成長したるものが肺の組織中に埋れをりて、この結核を包圍むところの組織は疾に「焮衝」を起し、漸次にその度を増し、且つ區域を擴張め、多くは「腫瘍」を生ず。この焮衝に伴ひ肺の組織は凝固りて、その苦痛を自覺するものなり。ここにいたる原因は後に説く所の細菌の繁殖るに隨ひます。病毒を運ぶし、遂にこの「腫瘍」は肺の上部に來り「化膿」り、その膿汁は結核の軟化となりて融解たるものと混じ、肺の組織中にありて表面に排出口なき囊を造る、これを「アブセス」乃ち「膿瘍」といふ。この膿は囊の一部と、氣管支の或る部分の組織を侵して、爰にその逃避すべき道を求めて破

○膿潰

○膿潰にいたるも傷痕を殘して癒ることあり

○空洞

○病後は危険

れ出づるなり。これを肺の『膿潰』といひ、時としては肺の組織もともに膿化なり融解して逃遁り、大なる穴となることあり、これを肺の『空洞』といふ。こゝに至り肺病は全備して、多くは回復の望みなし。然れどもこの『膿潰』が人體の外部に近き所にありて、その人の病の事情により、絶へず膿を排泄りつゝある間に、勉めてオキシダータの治療法を怠らざるときは、遂に回復の運に向ひ、『膿潰』の口を閉ぢて、後にはたい傷痕を殘すのみにて、肺の運動整理ひ、咳嗽も止み、全く治癒ることあり。然れども病後に適せざる季候、または他の誘引により、再び結核を生ずることあらんには、前よ

り一層危険にして、既に肺は病氣に堪へるの勢力衰へ、新敵に當ること能はざるべし。されば斯の如き病後にありては、猶更オキシダータの吸入は決して廢すべからざるなり。

第四章 肺の細菌

以上述ぶるところの如く、初めは小結核を生じ、『脈衝』となり、『膿瘍』となり、『膿潰』、『空洞』とあるその原因は、『結核桿菌』といふ細菌が疾患の原となり、この結核菌ますます繁殖し、病勢を擴張めて止まざるものなり。殊に恐るべきは、このもの病者の排泄物に混じて體外に出で乾燥きたるときは、空氣中に飛揚りて人の呼吸するに隨ひその肺の中に入

○結核桿菌

○乾燥して空氣中にあるときは殊に恐るべし

○オキシダー
タは直接に細
菌の隠棲に
接す

○遺傳の誤解

り、こゝにまた生殖を逞ふして、ますます肺病の傳播をいたすことなり。オキシダータは總ての病菌を殺すに特效あることは前にも述べたるところなれども、殊に肺の細菌にありては、これを吸入するときは、直接にその局所、即ち細菌の隠棲に觸接りて撲滅に勉むるが故に、その効驗の著きこと、如何なる殺菌法もこれに及ぶものあらざるべし。肺の病理を説くに當り、終りに一言を述べおかんとする一事あり。肺病はこゝに記したることく、細菌の侵入により傳播するものあるがゆゑに、『傳染病』殊に恐るべき傳染病たるには相違なきも、『遺傳病』ありとして、肺病者の血統の

○肺病は體質
を遺傳する事
あるも病毒を
遺傳せず

人までをも忌避るの傾きあるは、一通り無理からぬことありとは雖も、或は『遺傳』といふことにつき世人の誤解なきを保たず。肺病の遺傳といふは、肺病に罹り易き『體質』を遺傳する』といふことは或はこれあるも、微毒などの如く、病毒そのものを遺傳するものにあらざれば、健全なる人に對しても肺病の血統を受けたりといふを以て、直ちにその人も既に殆どこの病に罹りたるもの、如く考ふるは聊か酷に過ぐるの憾なきこと能はず。仮令その血統者たりとも、平素注意して豫防に怠らざるときは、必ず肺病に罹るべきものにもあらず、またその血統者たらざるも、何時傳染を受

け又は發病することあるも計りがたければ、何人たりとも平素攝生に怠るべからざるは云ふまでもなく、殊さらその血統の人は仮令健全なるも、常にオキシダータの吸入を勉め、決して豫防に怠るべからざるなり。

第五章

この治療法の最も治効ある

肺の病期

オキシダータの吸入治療法は上來に詳しく説明したる理由により、人生必須の療法にして、殊に肺病に特効あることは既に讀者の了解せられたる事と思はる。されども如何なる病期において、この療法 of 最も治効あるやは、尙は聊か述

○人生必須の療法にして殊に肺病の特効

○呼吸の一半を失ふたる者も尙ほ全治したる例あり

○簡単に徵候を知る心得

べおかざるべからず。前にいひたる最終の病期に達し、既に呼吸の一半の働きを失ひたるものさへも、肺の實質は萎縮りて、周圍より結締織といふ組織が増殖へて病竈(結核の局所)を包み、遂に全治したることも往々にしてこれある例なれば、如何なる病期にあるも決してこの療法を緩にすべからず。仮令最終の確定期に達し、必ず治ることを期しがたきも、この療法によりて、生命の續かん限り、延べ得らるゝかぎりを延べつゞけて、成るべく病苦の輕からんことに勉めざるべからず。然れどもこの療法 of 成効をして全からしめんには、成るべく早き病期において實行するの

○早き注意に
勝れるはなし

勝れるには若かざるあり。故に簡単に病状の程度を知らんには、病者の咯出したる痰を水の中に入れ、その痰が水底に沈むときは『膿潰』となりをることを知るべく、また午後一定たるときに於て、頬に紅き斑點を呈し、身體に熱氣の感あるは消耗熱を發し、病竈の膿化を起したるを知るべく、また足部、脚蹠等、水腫して蠟色となり、光澤を生じたるときは、この療法實行の時機大に遅れをることを知るべし。されば注意深き人は、無病の時たりとも、時々この療法によりて心身の健全を計り、萬病の豫防に怠らざらんこと肝要なりといへども、既に肺病に罹りたる徴候ありとすれば、初

○平素攝生の
緊要

○病者の運命
は病者自身の
手中にあり

期に於て、遅くも第二期において使用するを最も適當の時機ありとす。但し總て病勢の進歩、とりわけ肺病にありては、外觀に現はるゝよりもその實勢は一層進みをるものあれば、成るべく早くこの治療法を實行するに於ては、短命にして墓中に葬らるべきもの幾千萬人を救ひ得べきやを知られざるあり。

然れども仮令オキシダータの治療法を怠らざればとて、平常他の攝生を怠ることのあらんには、遂にその効全からざるべし。故に病者の運命は病者自身の掌中に握るものと知り、良醫に協りて治療、攝生二つながら相待ちて回復を速

かならしめ、醫家もまた醫治の補助法として、この治療法を
勸誘め、實驗せらるゝに於ては、常に病者の幸のみにあらず
して、實に世の中の幸あり。

第六章 オキシダータ治療法の適應

する諸病

オキシダータは血液を清潔にし、酸化作用を盛にし、消化液の
分泌を増し、人體總ての『新陳代謝』を速かならしめ、細菌を
殺すの力ある等の理より推す時は、此治療法は殆ど萬病に
適應すべしといふを得べけれども、賣藥の効能書の如く、其
何が故に治効あるやを明にせず、唯多くの病名を列べて、萬

○道理を推し
て考ふる時は
此法の適否は
何人にも知る
らる

能を誇張るものとは自から異り、上來に述べたる道理を推
し、各々その病理に照し考ふる時は、この治療法の適否
は何人にも知るを得べく、且つ種々様々なる多くの病氣を
一々擧ぐるに違あらざれば、實驗上道理より推究めて、治効
著きものを左に摘録せん。但し急性のものよりは、慢性の
諸病には一層の効能ありと知るべし。

〔注意〕左の病名の下、括弧の中に記したるは病氣の種
類により特に必要ある使用法を示したるものにて、巻末
(第七章)の使用法の條下に示したる、口より吸入する
法を行ひつゝ、尙ほその上にこれを併せ行ふべき方法を

○呼吸器病

示したるものにて(含)とあるは合嗽、(外)とあるは外用にして洗滌または布片に浸してその局所を蔽ひおくもの、(鼻)とあるは鼻より吸入すること、(鼻)とあるは合嗽と鼻より吸入することを併せ行ふことにして、何も記さざるは吸入のみを行ふものと知るべし。尤も如何なる病氣にてもたゞの吸入は決して廢すべからず、總て分量その他巨細きことは使用法の條下に述べべし。

○この治療法が諸般の「呼吸器病」に適することは前に肺病につきて述べたる道理を推して知るを得べしといへども、まづ『鼻加答兒』、『喉頭加答兒』(含)は多く『感冒』(含)よ

○氣管諸病

り起りまた貧血、衰弱、色蒼白く腺病質の人、平素塵埃を呼吸する人に多く、血行の變化を來し中には貧血性のものである、『喉頭軟骨膜炎』(含)俗に喉腫といふに類し、諸種の炎症の病氣に繼續きて發る。

『氣管支加答兒』は屢々發する病にて、感冒より起りまた貧血、衰弱の人、塵埃または刺戟物を呼吸する人、貧血性の人、呼吸器を病む人等に多く、季節の變り目に發すること多く、一種の細菌の侵すがために、空氣療法を稱用する大家多し。『喘息』は呼吸の困難を覺え、酸素の不足より起るとさへいふ位の病氣にて一時氣管支の狹窄によつて起り

氣管支筋の痙攣、乃ち神經性のものと氣管支粘膜の腫脹、乃ち加答兒性との二種ありて感冒、鼻加答兒、喉頭、咽頭および氣管支加答兒等より起ること屢々ありて、この治療法に勝るものはあらざるべし。但し神經性のものよりも加答兒性のものに最も適應す。

○肋膜炎

○『肋膜炎』は感冒等により細菌の侵入より起り、羸瘦病、諸種の惡液質、懷血病、疝風等の補助によりて發し、肋膜に沈着物を形成し或は化膿性の液汁を生ずるものなり。

○消化器病

○『消化器病』にありては「消化不良」といふは多頭怪物にして、種々の病形、種々の程度において現はるゝものあれども、

一たびこの吸入法を實行するときは食欲の昂進むを以ても既にその効の速かなるを知るべし。『胃加答兒』、『腸加答兒』は何れも飲食の不攝生、胃の鬱血、呼吸器病、血行器病、貧血、惡液質等より來り、局所腫脹、粘膜液を分泌し、血管の充血となり、『胃痛』は神經性のものにして男子よりも婦人に多し、比斯的里、神經衰弱、萎黃病または産後、病後の衰弱などより來り、『神經性消化不良』は如何なる服薬も應せざることを多ければ、この治療法最も適せり。『腹膜炎』は略ぼ肋膜炎と同じく細菌の侵入に原因し、膜に化膿性液を生ずるものにして、『黃胆』は胆汁が血液中に侵入して

組織中に入り、遂に皮膚の色までも變ずるものにて、醫治により原因治療の補助法としてこの療法必要なり。『痔疾』もまたその醫血を治するに效あり。『癌腫』にはその局所に直接の効薄しと雖も、之に繼續て發する他の病症を防ぎ主治の補助法として肝要なり。『鵝口瘡』、『口腔加苔兒』、『口腔糜爛症』等は消化不良、換氣不良、口内不潔、貧血、腺病質、衰弱のものに多く、空氣中にある細菌が侵入するに依りて起り、小兒哺乳の後口内の清拭を怠るなどによりて起るものあり。

○關節および筋肉『儂麻質斯』もまた細菌の侵入に由るな

スロニーマチ

れども、赤血球減じて白血球増加し關節腔中に多くの液状の滲出物を蓄へ腫脹をなし疼痛を起すものにて、この治療法の奇効あるは屢々實驗せり。

○脚氣
○『脚氣』は一種の中毒にして主に末梢神經を侵し、また新陳代謝に關係あること尠からざれば是まで實驗により屢々奇効を奏し、年々夏季に發るものには前年の冬より吸入法を持續けしめたるに効能さらに著しかりき。

○神經病
○神經性『頭痛、偏頭痛』は比斯的里、神經衰弱、癩痢、精神過勞および興奮の後、酒、煙草、茶の濫用または感冒その他の諸病に伴ひ、婦人は月經時等に起るものにして、その貧血

性と充血性との何れにも効あり。『比斯的里、神經衰弱』は精神過勞および興奮により或は春機發動期等に起り、比斯的里は女子のみに限らざれども、普通に子宮病として知られざる程にて婦人に多くして貧血を伴ふものなり。『神經痛、神經麻痺』(吸入及び布片に浸して麻痺の局所を摩擦すべし)等その種類多けれども感冒、外傷、傳染、中毒より來り、または他病の影響より來るもの多く何れにも適當の治療法なり。

○淋疾

○『淋疾』(男女とも吸入及び注射)淋毒は矢張り細菌にして、多くは尿道粘膜の表面に占居るものあれば、注射は最

も適應すれども根本治療には必ず吸入をも廢す可らず。

○腺病

○『腺病』は俗に『瘰癧』といふもの、『淋巴腺腫』もまたこの種の病にて淋巴腺の結核なり。新鮮き空氣の缺乏より來ること多く腺病質の人は常に吸入法を持続けるを可とす。

○皮膚病

○凡そ一ヶ月間もこの吸入治療法を實驗したる人は、皮膚潤澤となり著しく變化を來すを以ても總ての『皮膚病』に効驗あるを知るべく、この法の適應ざる皮膚病は一もこれあしといふを得べし。その重なるものを擧ぐれば、『酒齶鼻』は飲酒より來る病にして鼻端鶏頭のごとくなるもの、

『癩風』は糸状菌が皮膚に侵入するがために斑紋を生ずる病、『白皮病』は神経病または衰弱を來す病より發する全身若くは局部に白き斑紋を生ずるもの、『濕疹、乾癬』(乾癬は濕疹と略ぼ同くたゞ濕氣と強き癢痒を缺く、用法は、吸入と外用)は爬搔或は摩擦、擦傷、刺戟、日光直露、胃病、糖尿病、痛風、腺病等より起り、濕疹は皮膚、血管より水漿を出すによる。『蕁麻疹』(外)は蕁麻、漆樹などの疔れ、昆蟲の刺創、あるひは蝦、蟹、その他鹽魚等を食し發疹するものにして、その毒を血管より皮膚に及ぼすなり。『紅疹』(外)は惡寒、發熱して全身に倦怠を來したる後多くは内腿に發

疹し腺病、淋疾、麻刺利亞等の諸病より來り殊に婦人に多し。『粟粒疹、汗疱疹』(外)共に粟粒ほどの水泡のごとき發疹にして強き發汗の後發するもの。『粉脂、面皰』は俗にいふニキビの類にして何人にも妙齡期に發するものあり、脂腺および毛囊の炎症により、または皮膚の脂肪を分泌する力弱きにより、中には惡液性、中毒性、微毒性のものもあり。『頑癬、苔癬、鱗癬、疥癬』(外)殊に疥癬は疥癬虫といへる一種の蟲が表皮、とりわけ津液に富むところの指間、手腕の屈曲のところ腋窩、乳の下陰部などに生ずるもの、また『多汗症』は多く肥滿たる人、脂肪質の人之を

○血行器病

患ひ、殊に『腋窩汗症』は『臭汗』といひて月經不順、萎黄病の婦人に多し。『皮脂減少症』とて皮膚の脂肪減少し常に乾燥して『疥、肌癬』を生ずるものによし。『禿髮症』(外)は毛髮の脱落する病にして、重に頭髪に來るものなれども稀には鬚髯、眉毛、睫毛また漸次に液毛、陰毛におよぼすものあり。近來俗に台灣坊主といふものにも可なり。

○『血行器病』にありては『心筋衰弱、脂肪化心臓』等は全身の津液失亡、血液變狀、萎黄病、白血病、貧血等より來り、必ず鬱血症を伴ふものにして、その他諸般の心臟病に効あり。『白血病』は麻刺利亞、微毒、腺病、その他衰弱よ

○腎臟病

○膀胱諸病

り來り血液中に赤血球減少して白血球益々増加するの症なり。『貧血病』も赤血球僅少となる病にして營養不良などより來り輕すべからざる病なり。

○諸般の『腎臟病』就中『腎臟炎』は血管充血し、時としては出血して尿中にこれを認むること稀ならず、醫家も治療するの法殆どこれなきものゝごとし。されば攝生を第一としてこの治療法を實施するの外なかるべし。

○『膀胱炎』は感冒、淋疾その他の病氣に伴ひ細菌の侵入するが故にして膀胱粘膜充血し、その分泌を増加するものにして刺戟性の飲食物を禁め、下腹を温め静臥てこの法を

實施せば甚だ効あり。『膀胱麻痺』は脊髄病、神経病、比
斯的里、淋疾等より來り、排尿困難とある病なり。『遺尿
症』は大人にありては重き神経病者に之あれども、甚だ稀
れにして多くは小兒の病なり。

○生殖器病

○『陰萎症』は膀胱神經病の一なり。『遺精』は不制欲あ
るひは淋疾、神経病その他諸般の衰弱より來り、後には顔
面蒼白くなり甚しき羸瘦を來すものあり。

○萎黃病

○『萎黃病』は婦人病にして多くは春機發動期に起り、長
く坐する人、身體過勞、營養不良、精神興奮、心痛、變愛等
より來り、月經不順となり頰部、唇口、耳珠などは淡紅色とな

○壞血病

り、その他は淡黄または淡緑の色となり、赤血球減少して
貧血となり、僅かの運動にても呼吸促進、心悸亢進、汗を發
し易く、氣力衰ふる病なり。『壞血病』は多くは營養不足
より來り、時としては齒齦の「カタル」を起すことあり、其
他諸般の『子宮疾患』等何れもこの治療法最も適當せり。

○子宮病

○新陳代謝の諸病

○『脂肪過多症』は脂肪病といひて、身體に脂肪多くな
る病なり、肥満性と貧血性との二症あり、肥満症は勞動少
くして美食をなし、酒、菓子類を多飲多食する人に多し。
貧血症は萎黃病、血液消亡、産後その他病後の衰弱、貧血等
より來るもの、『痛風』もまた脂肪病と同じく營養過度か

○傳染病

又は不足より來り、尿酸多くあり、時としては關節に沈滯りて、關節腫脹れ、疼痛を起し、または内臓を侵し重病となることあり。『糖尿病』は血液中に糖分過剰る症にして比斯的里、神經衰弱、癲癇、精神病等より來り富裕なる人に多し、從來醫療上特效ある内用藥殆どこれなし。脂肪病以下は何れも新陳代謝に關する病氣なるが故にこの治療法は最も必要なり。

○『傳染病』にありては『麻刺里亞間歇熱』乃ち俗に瘧といひて泥瘧毒にして血液中に原虫類に屬する動物を生じ、傳染の毒素をなす。『インフルエンザ』もまた鼻涕

○癩病

○微毒

及び氣管支の分泌物中に細菌あり。『腸窒扶斯』、『格魯布』および『實扶的里亞』もまた共に細菌の作用なれども腸窒扶斯は回復期に於て最も効あり、○虎列刺病其他諸般の惡疫流行の時は豫防のためこの治療法は寸時も緩せにすべからず。

○『微毒、下疳』(外)は今さら説明するまでもなく如何なる治療法を實行しつゝあるも、決してこの治療法を廢すべからず。

○『癩病』については別に附録として此病氣の特效藥のこと、共に詳しく説明したれば其附録を一讀あるべし。

○諸病の回復期及病後

○諸病の『回復期』より『病後』には何病に限らず必要の療法なり。

○此治療法は著く外觀に變化を來たす

○總てオキシダータの吸入治療法を實施し血液精良となりたるときは、その證據として病者の外觀に著るしく變化を來し、身體豊肥りて體量を増し、容貌快活となり、顔面に小瘡などあることなく、皮膚に色澤を生じ、指頭を以て觸り靜かに撫摩るとききは恰も天鵝絨のごとく軟かなりと雖も弾力あり、眼は光輝を増したるかの感じあり。されば平素皮膚粗質くしてその色蒼白き人、または小瘡などある人は一二箇月間の實施により著るしく變化を來すを見るべし。

○光線を遮り寒冷の場所に貯ふべし

第七章

オキシダータ使用法

オキシダータは液中の酸素が分解れ易き傾きあるにより、光線の透射を防ぐため、琥珀色の硝子瓶に入れあれども、成るべく木栓を固くなくして寒冷なる場所に仕舞ひおくべし。この液は使用のとき水を以て稀釋くするもの故、これを原液と稱ふ。

○原液を稀釋する水は純良なるを要す

○雨水採集法

オキシダータの原液を稀釋くするに用ゆる水が若し純良ならざるときは、その効能を妨ぐることもあるにより、成るべくは蒸溜水を用ゆるを良とすれども、若しこれを得がたき場合には降雨のとき雨水を取りおきて用ゆべし。これを採

るには清淨にして適宜き長さなる四本の竹または木の棒を立て、各々その棒の上端に白色の清き布片の四隅を拭り附けて正方形に張り、その下に清淨なる口の廣き陶器または硝子器を受け、布の中央に能く洗ひたる小石や砂を置くときは、その凹處に雨水は集り、塵埃を濾してその下にある受器の中に溜るべし（降り始めの雨水は空中にある塵埃とともに降下るものゆゑ、雨の降初めを暫らく避けるべし）。この雨水を貯へおきて用ゆべしと雖も、これもまた得がたきときは、純良なる井水を用ゆべし。都會にて改良水道の布設しある場所にてはその水を用ゆるも可なり。

○吸入器使用法

さて「氣體吸入器」(挿圖參看)の瓶(甲圖)の横線(甲圖六)まで純良の水を入れ木栓を挿し、この吸入器に添ひたる小鍋(九)に普通の水を入れ、その中に水の入りたる瓶(甲圖五)を入れ、そのまゝ、鍋を火上に置き凡そ華氏百度(攝氏三十八度)位、乃ち人の手にて持ち微温湯位の度に温め、鍋のまゝ、火上より卸し、別に添へたる小き硝子の量器(八)にて原液を量り、(一杯乃ち凡五瓦を一回の分量とす)發氣吸(甲圖五)の木栓を取りて、原液を注入み、木栓の代りに硝子栓乃ち通氣管(四)と、曲りたる吸氣管(二)の聯りたる瓶栓(三)を注意して瓶の口に挿込むべし。

○吸入する時の姿勢

斯て吸入者の姿勢を正しく整へ、胸を少し前の方へ突出し、頭部を正直にし顔を垂れる様にして、右の吸入器を（冬季は温度の冷却のため銅のまゝ）持ち、便利の高さに支へて吸気管（二）の曲りたる一端を使用者の口に啣へ唇を閉ぢて、成るべく深く且つ長く吸息をなし、口は啣へたるまゝにても又は吸気管より離すとも何れにても唇を塞ぎたるまゝ鼻より吸息をなすべし、斯くする時は、空気が通気管の上部にある圓筒乃ち消毒管（一）の内に挿入ある消毒綿にて消毒せられ、瓶内の水中に入りて渦立ち、化合したる酸素は分解すして蒸發氣に伴ひ、容易に肺中に入込むべし。

○酸素は分解せずして容易に肺中に入る

○吸入の時間及び呼吸の回数

吸入する一回の時間は初は凡そ三分乃至五分時間續けて行ひ、追々適宜に延長し六七分若くは十分時間に至るも妨げなし（病者にて疲勞を覺ゆるときは時々休息みて行ふべし）。斯の如く時間にて計るも、又は使用者の實驗により、始め呼吸の数を定めおき、その數にて定むるも隨意なり。例へば成るべく深く長き吸息をなし大約その數五十以上と定め置き、之を一回の吸入時間となすべし。二箇月以上引續き吸入する時は、後に至るに隨ひ追々少しづつ時間を延ばし、または呼吸の数を増すべし。

○鼻腔吸入の方法

鼻カタル、感冒等のとき、鼻腔より吸入するには少し温度

を上せて、「吸入器」に添ひをる硝子の球の附きたるゴム管
(七)に吸入管(二)の曲りをる一端を挿込み、球の方を鼻腔に
挿込み、指頭にて他方の鼻腔を塞ぎて吸入し、口より呼吸
を出すべし。

吸入を終りたる時は、注意して硝子栓(三)を抜き、發氣瓶の
中の水は其儘にして木栓を堅くなし、冷かなる所に仕舞ひ
置き、第二回の吸入を初る時も亦初の如く原液を計り、前
の瓶の水に注加へて吸入し、一週間毎に第一回の如く瓶の
水を取換ふべし。

○回数及び時

斯のごとく一日二回づゝ吸入するを定めとす。乃ち食事

○使用後の液
は貯へおき外
用に供すべし

前一時間か、または食事二時間後に行ふ筈なれども、業務
その他の都合によりては、使用者適宜にその時間を定むるも
妨げなし。

吸入瓶の中の水は一週間は取換へることなく、毎回原液
を注加へるものゆゑ、後に至るほど濃厚あるにより、之を
放棄ことなく、他の瓶に貯へ堅く栓をなし置き、必用に臨
み外用に充つべし。但し沈澱物を生じたる時は用ゆべか
らず。

吸入瓶の中の水が横線より減じたるときは、水を加へて横
線まで充たし、またこの線より増加したるときは、瓶中の水

○吸入後の感
覚は人々相違
あり

を線まで減すべし。
適當の吸入時間は人々により相違あり。或る人は二三分にて感應を起し一小盃の酒を呑みたるかの感じある人もあり、また或る人は三十分時間の長さ吸入をなすも毫も感動なき人もあり、この感應の有無は治病の効能には毫も關することなし。通常前に述べたる時間を以て適當となす、若し餘暇ある人は吸入の後一睡するを良とす。
吸入器の中の水は、温度高きほど、吸入せらるゝ酸素の量を増す理なれども、餘り温度の高きは瓶中にて酸素の分解を起し、又は咽喉の粘膜を害する等の恐れあれば、吸入の

○吸入の際の
温度

○吸入後の注
意

際、咽喉の感じ心持よき程の温度を最も適當とす。但し鼻より吸入するときは、少し温度を高くするも妨げなし。
吸入の後、發汗したる時は、急に塞冷ある空氣に觸るゝべからず。

○外用の方法

原液壹瓶は凡そ一月間の吸入用に充つるものなれども、十歳未満の小兒には二ヶ月以上の使用に充つるものとす。
總て外用に供するには、原液を十倍の水に稀釋くすべし、但し吸入後のものは其まゝにて外用に供すべし。
外用に供する時は、其種類により洗滌を要するものは、清淨なる毛筆等を以て洗ひ、又病種によりては布片に液を浸し

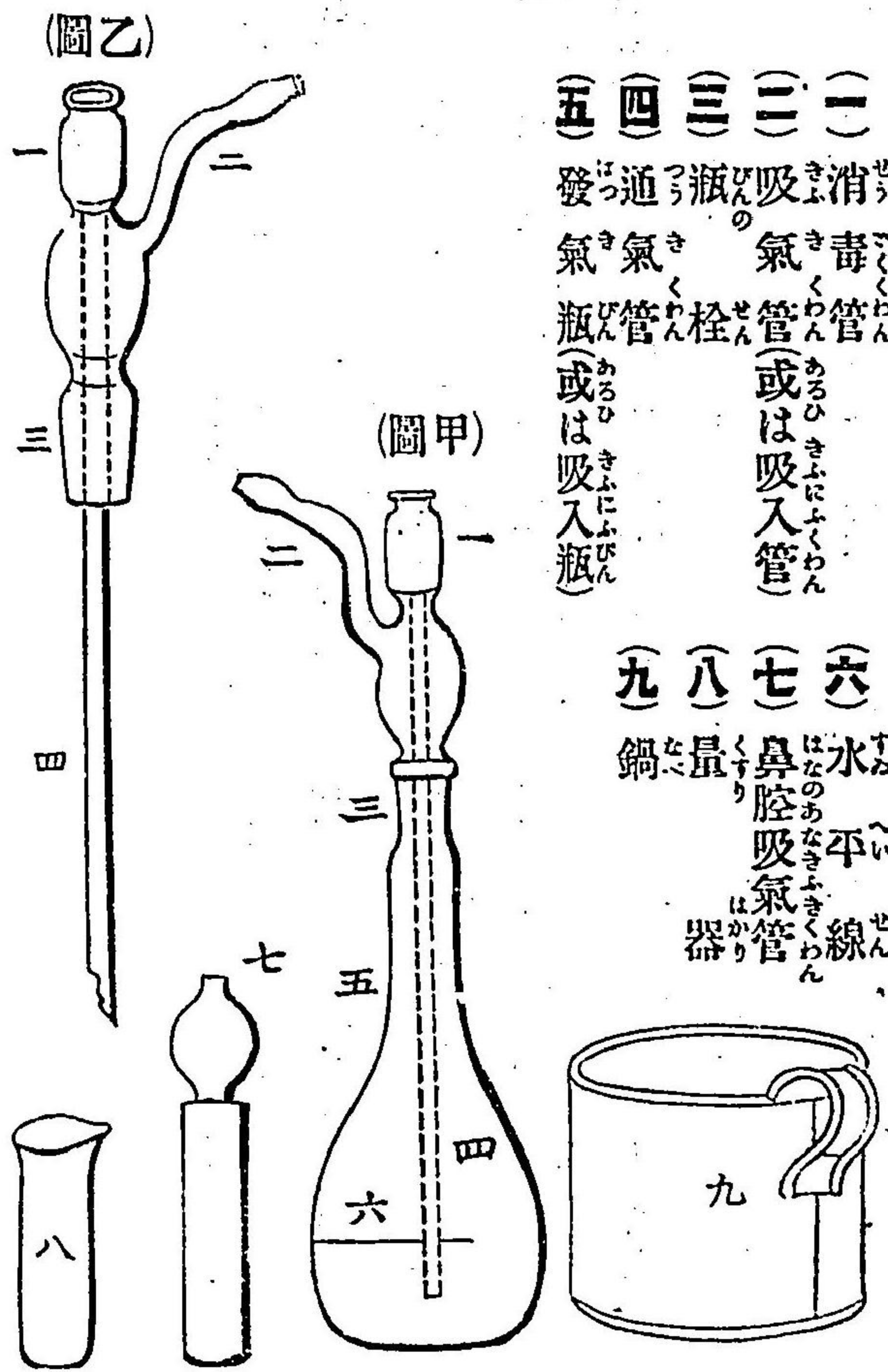
○この治療法
持續中は禁酒
禁煙を要す

て患所を蔽ひ、其上を乾きたる布にて巻き括りおくべし。
若し化膿の腫物等には、初め一旦沸騰したる湯を微温に冷
して、之にて局部を能く洗ひ膿汁を去りたる後、藥液を布に
浸したるものを以て蔽ひおくべし。一日二三回も斯の如く
なすときは、自然に肉芽を發生し速に治癒るものなり。
この治療法を繼續中は、成るべく飲酒を禁るをよしとす。
萬々止むを得ざれば、吸入前二時間、吸入後一時間を除き
少量の一酌ぐらゐは妨げなし。喫咽もまた甚しき習慣の
あるにあらざれば成るべく禁するをよしとす。

第 六 圖

「氣體吸入器」(甲圖)は(一)(二)(三)(四)が結合したる(乙圖)
の瓶栓を挿入たるもの

- (一) 消毒管
- (二) 吸氣管 或は吸入管
- (三) 瓶栓
- (四) 通氣管 或は吸入瓶
- (五) 發氣瓶
- (六) 水平線
- (七) 鼻腔吸氣管
- (八) 量器
- (九) 鍋



○附言

オキシタータは、東京帝國大學教授下山博士の指導の下に製造するものにて、その原料を精選するは勿論、複雑なる手数を經る事にて、周到ある注意を要するが故に、猥に其製造を他人に任じ難けれども、同愛館にては然るべき學識經驗ある人が監督し、二三學士の顧問をも有し、製造の上に充分の信用あるに由り、今回同館主の乞ふに任せ、その製造を許したれば、この治療法を試みんとせらるゝ方は總て同館に照會せらるべし。

明治卅五年十一月二十五日印刷
 全 年十一月二十八日發行

※※※※※
 正價金壹圓
 ※※※※※

不許複製

著者兼 近 藤 行 藏
 發行者

東京市下谷區中根
 岸町三十七番地

印刷者 安 藤 忠 容

東京市神田區旅籠
 町二丁目十一番地

印刷所 廣 業 館
 前 同 所

東京市本郷區湯島切通坂町八番地

發賣元 南江堂書店
 發賣書 肆東京市日本橋區通三丁目丸善書店

○廣告

●『オキシダータ』壹瓶（一箇月間吸入用）正價金五圓

●『氣體吸入器』壹個（特許出願中）正價金壹圓

御注文の節は、『當市内』は直に御届け申上候得とも、その他の御注文は、右の正價の外に、左に掲ぐる『小包郵便料』を添へ、御送金相成り候は、直に發送可仕候。○郵便爲換は總て『下谷郵便局』渡りに御取組被下度候。○御望みによりては『代金引換小包』にても相送り可申候、この場合に於ては、左に掲ぐる『小包郵便料』の外に、『代金引換小包郵便手数料』と、『郵便爲換手数料』とを合せ、物品引換に御支拂可被下候。

小包郵便料	摘要	十里迄	百里迄	二百里以上
「オキシダータ」壹瓶 「氣體吸入器」壹個	壹箱	九錢	拾六錢	參拾貳錢
「オキシダータ」壹瓶	壹箱	七錢	拾貳錢	貳拾四錢
全	貳瓶 壹箱	九錢	拾六錢	參拾貳錢
「氣體吸入器」	壹箱	七錢	拾貳錢	貳拾四錢

この外、汽車、海船、通運等御指圖に従ひ御送り可申上候

製造發賣元

東京日本橋區西河岸町十一番地
(發賣假事務所)
(電話本局七九八)

東京同愛館

取次所
 全 東京下谷區元黑門町六番地角 時計店 鈴木茂八
 全 下谷區徒士町一丁目四番地 沙見乙次郎
 全 麴町區麴町六丁目十四番地 志村劔七郎

00
別冊
142

